

高槻市

成合1号墳

主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）整備に伴う埋蔵文化財調査業務委託（その2）・近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（高槻～箕面間）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査（その3）

2013年2月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

成合1号墳

主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）整備に伴う埋蔵文化財調査業務委託（その2）・近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（高槻～箕面間）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査（その3）



1. 成合1号墳全景（上空から）



2. 調査地全景（北から）
中央手前が古墳、奥に高槻市街地、左奥に左から右に流れる淀川を望む。
右下は近接する成合遺跡調査地。



3. 横穴式石室全景（北西から）一手前が玄室部分、奥が甕道部



4. 成合1号墳 玄室および甕道から出土した遺物

序 文

本書は、昭和 62 年の第四次全国総合開発計画において、閣議決定された新名神自動車道（法定路線名：近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（高槻～箕面間）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書です。金龍寺旧境内跡は、平成 23 年の確認調査によって遺跡として登録された新しい遺跡です。同年には金龍寺旧境内跡に関わる初めての発掘調査が行われました。今回の調査は、その 2 箇所目の調査です。

高槻市成合地区は、北摂山地から南に張り出した丘陵に囲まれた谷底平野です。周辺には、古くから人間活動の形跡が数多く残されています。遺跡名称である「金龍寺」は、成合谷東の山中にあった平安時代に開かれた山岳寺院です。古代豪族「阿部氏」の流れを汲む平安時代の参議阿部是雄による創建と伝えられ、有名な歌人能因法師の歌に詠まれるなど華やかな一面を持つ古代に始まる寺院です。

この調査では、金龍寺の歴史に関わる可能性のある遺構とともに、これまで知られていなかった古墳が発見されました。本書の題名は、発掘調査の成果を鑑みて、その古墳に命名された名称『成合 1 号墳』としました。古墳は、横穴式石室を埋葬施設に持つ 6 世紀後半に築造されたもので、破壊は受けていましたが埋葬状況がわかる貴重な発見となりました。今後、この周辺の歴史を考える上で地域の歴史の解明に重要な資料となると期待されます。

今回の発掘調査を実施するにあたり、多大なご協力とご配慮をいただいた地元関係各位をはじめとして、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会、大阪府茨木土木事務所、西日本高速道路株式会社関西支社に厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 2 月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 田 邊 征 夫

例 言

1. 本書は、金龍寺旧境内跡（その3）（調査名：金龍寺旧境内跡 12-1）の発掘調査報告書である。金龍寺旧境内跡は高槻市成合地内に所在する。本書の書名については、今回の調査の中で確認された古墳に新規に命名された「成合1号墳」の名称を調査成果との関わりから採用している。
2. 本調査は、大阪府茨木土木事務所との委託契約による主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）整備に伴う埋蔵文化財調査業務委託（その2）と西日本高速道路株式会社関西支社との委託契約による近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（高槻～箕面間）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査（その3）に関わる発掘調査である。公益財団法人大阪府文化財センターは、西日本高速道路株式会社関西支社と平成24年5月28日に、大阪府茨木土木事務所と平成24年6月1日に委託契約を締結して、平成24年6月1日から平成24年9月29日まで現地調査を行った。その後、平成24年10月1日から11月30日まで整理作業を行い、平成25年2月22日に本書を刊行し、全ての業務を完了した。
3. 調査および整理作業は以下の体制で実施した。

調査部長 江浦 洋
調整課長 岡本 茂史
調査課長 岡戸 哲紀
同主幹 金光 正裕
同主査 片山 彰一〔写真〕
同副主査 廣瀬 時習
4. 調査の実施・整理にあたっては、地元高槻市教育委員会、高槻市今城塚古代歴史館のほか、下記の方々にご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

鐘ヶ江 一郎・宮崎 康雄・高橋 公一・早川 圭（以上、高槻市教育委員会）、森田 克行・内田 真雄・今西 康宏（高槻市立今城塚古代歴史館）・辻川 哲朗（公益財団法人滋賀県文化財保護協会）・奥田 尚（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）
5. 本書の執筆および編集は廣瀬時習が行った。
6. 本調査に関わる遺物、写真、図面、データ等は、すべて「金龍寺旧境内跡 12-1」の調査名称を冠し、当センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 挿図の縮尺は、各図内にスケールバーを掲げ、縮尺率を明示した。
遺構図および断面図の使用単位尺は、mを基準とした。基準高は、東京湾平均海水面（T.P.）を使用した。また、遺物図の使用単位縮尺は、cmを基準とした。本書の記述もこれと同様である。
2. 遺構平面図の使用測地系は、「世界測地系（測地成果 2000）」であり、これに準拠した平面直角座標系第Ⅵ系を使用した。単位はすべて m で表記した。
3. 遺構平面図に付した方位針は座標北を基準とし、磁北は西に $6^{\circ} 18'$ 、真北は東に $0^{\circ} 12'$ 振っている。
4. 土層や土器胎土の色調については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用して識別した。本書図中での記載順序は、記号・土色名・土質名の順である。
5. 本書で用いた調査区名は、『遺跡調査基本マニュアル』財団法人大阪府文化財センター 2010.12 に準拠し、本来は調査番号「12-1」の後に調査区名を続けた形（12-1-1 調査区、12-1-2 調査区…）とすべきであるが、記述にあたっては調査番号を省略している。
6. 遺構番号は基本的に現地調査において付番したものを踏襲した。現地調査では、遺構の種類に関係なく調査区ごとに1から通し番号を配し、遺構の種類の前にアラビア数字の番号を付けて「1溝」のように表記した。
7. 遺物番号はすべて「通し番号」とした。本文中では、当該項目のタイトルに図番号を記載し、その後の記述では、当該の図の初出の時と特に必要な場合のみ「図8-4」などと図番号を記し、その他は通し番号のみを記載している。遺物写真図版については、挿図に記した当該遺物の「通し番号」を記載した。本文中で、引用する場合は、「図版 12-1」などと図版番号の後に挿図の通し番号を記した。
8. 本書文中において引用した文献は、【引用・参考文献】として、巻末に列挙した。なお土器・須恵器などの記述については以下の文献等を参考にしている。
中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
大川清他編 1996『日本土器辞典』雄山閣出版
田辺昭三 1983『須恵器大成』角川書店
中村 浩 1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房出版
その他を参考にしている。

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

凡 例

第1章 調査の経緯と方法	1
1) 調査の経緯と経過	1
2) 調査地とトレンチの設定	2
3) 調査区の設定方法と概要	2
第2章 遺跡の立地と環境	5
1) 地理的環境	5
2) 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	8
1) 1調査区—第1面の調査成果—	8
2) 成合1号墳の調査成果	15
3) 2～6調査区の調査成果	26
第4章 総括	34

挿 図 目 次

図1 新名神高速道路建設計画概念図	1	図14 玄室および羨道の遺物出土状況	21
図2 調査地の位地と区割り	3	図15 石室掘方平面図	22
図3 遺跡周辺の地形と歴史的環境	6	図16 石室出土遺物実測図(1)	23
図4 1調査区 第1面平面図	9	図17 石室出土遺物実測図(2)	24
図5 1調査区 基本層序断面図	10	図18 2～6調査区 平面図	26
図6 1調査区 検出遺構平・断面図(1)	11	図19 2調査区 土層断面図	27
図7 1調査区 検出遺構平・断面図(2)	12	図20 3調査区 土層柱状図	28
図8 1調査区 出土遺物実測図	13	図21 3調査区 石組遺構平・断面図	29
図9 墳丘部分南北断面図	16	図22 4調査区 土層柱状図	30
図10 墳丘測量図	17	図23 5調査区 土層断面図	31
図11 石室平面図	18	図24 6調査区 土層断面図	32
図12 床面検出状況図	19	図25 2～6調査区 出土遺物実測図	33
図13 石室横断面図	20	図26 木棺推定位置の復元	35

巻頭カラー目次

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 成合1号墳全景(上空から) | 3. 横穴式石室全景(北西から) |
| 2. 調査地全景(北から) | 4. 玄室および羨道から出土した遺物 |

挿入写真目次

写真1	2～6調査区全景	2	写真4	現地立会の様子	2
写真2	横穴式石室の実測作業	2	写真5	墓壙上面の石材(南西から)	5
写真3	1調査区の尾根(北から)	2			

写真目次

図版1 遺構

- 1. 1調査区 第1面頂部検出遺構(北から)
- 2. 1調査区 3トレンチ西側(南から)
- 3. 1調査区 1トレンチ西側(南から)
- 4. 1調査区 5土坑(西から)
- 5. 1調査区 6土坑(西から)

図版2 遺構

- 6. 1調査区 墳丘全景(南西から)
- 7. 1調査区 羨道部・玄室を望む(南から)

図版3 遺構

- 8. 1調査区 床面遺物出土状況(1)(北東から)
- 9. 1調査区 床面遺物出土状況(2)(南西から)

図版4 遺構

- 10. 1調査区 床面遺物出土状況(3)(西から)
- 11. 1調査区 遺物集中部の状況(南西から)

図版5 遺構

- 12. 1調査区 石材据付跡の検出状況(北から)
- 13. 2調査区 第2面検出状況(北東から)

図版6 遺構

- 14. 3調査区 第1面の検出状況(南西から)
- 15. 3調査区 石組遺構の加工面検出状況(南から)
- 16. 4調査区 第1面検出状況(南東から)
- 17. 3調査区 斜面上部よりの全景(南東から)
- 18. 4調査区 ピット状遺構(南東から)

図版7 遺構

- 19. 5調査区 第1面検出状況(東から)
- 20. 5調査区拡張部 第1面の検出状況(北東から)

図版8 遺構

- 21. 6調査区 第1面検出状況(北から)
- 22. 6調査区 第1面検出状況(北東から)

図版9 遺物

図版10 遺物

図版11 遺物

図版12 遺物

図版13 遺物

図版14 遺物

第1章 調査の経緯と方法

1) 調査の経緯と経過

この調査に関わる新名神自動車道は、昭和62年(1987)の第四次全国総合開発計画において、閣議決定されたものである。平成元年(1989)には基本計画が公示された。新名神自動車道(法定路線名:近畿自動車道名古屋神戸線)の名称は、平成19年(2007)に発表されている。

平成4年度(1993)には、(財)大阪府文化財センター(現:公益財団法人大阪府文化財センター)が高槻~箕面間の計画路線内の分布調査を実施している。平成22年度(2010)には、確認調査が実施され、この結果を受けて新規発見の遺跡として「金龍寺旧境内跡」が登録されている。この間に、大阪府茨木土木事務所と西日本高速道路株式会社関西支社は、大阪府教育委員会と遺跡の取り扱いについて協議を行った。この結果、大阪府教育委員会は調査の必要な範囲を指示するとともに公益財団法人大阪府文化財センターに対して、当該地区の調査を実施するよう指示した。

これを受けて、公益財団法人大阪府文化財センターでは、大阪府茨木土木事務所と西日本高速道路株式会社関西支社と平成23年6月付けで委託契約を締結し、近畿自動車道名古屋神戸線新設事業(高槻~箕面間)と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス(高速道路 成合工区)事業との同時施行に伴う埋蔵文化財発掘調査(その2) 金龍寺旧境内跡の発掘調査が行われた。また同年から平成24年4月にかけて、金龍寺旧境内跡から成合遺跡南端付近において確認調査が実施された(金龍寺旧境内跡 11-2)。この調査では、金龍寺旧境内跡内において古墳に関わる可能性のある遺構や成合遺跡南端付近において遺構を確認した。この結果を受けて、平成24年6月付けで金龍寺旧境内跡の遺跡範囲が改訂されている。

今回の発掘調査は、前述の確認調査の結果、金龍寺旧境内跡内のトレンチにおいて古墳の可能性があり追加の調査が必要と判断されたため、公益財団法人大阪府文化財センターが平成24年5月28日付けで日本高速道路株式会社関西支社と、大阪府茨木土木事務所と平成24年6月1日付けで埋蔵文化財の発掘調査の委託契約を締結し、平成24年6月1日から現地調査に着手した。

現地調査は、平成24年6月1日から平成24年9月29日までの間実施した。調査面積は1,146㎡を測る。調査においては、確認された遺構や地層断面について写真撮影や図面作成などの記録作業を行

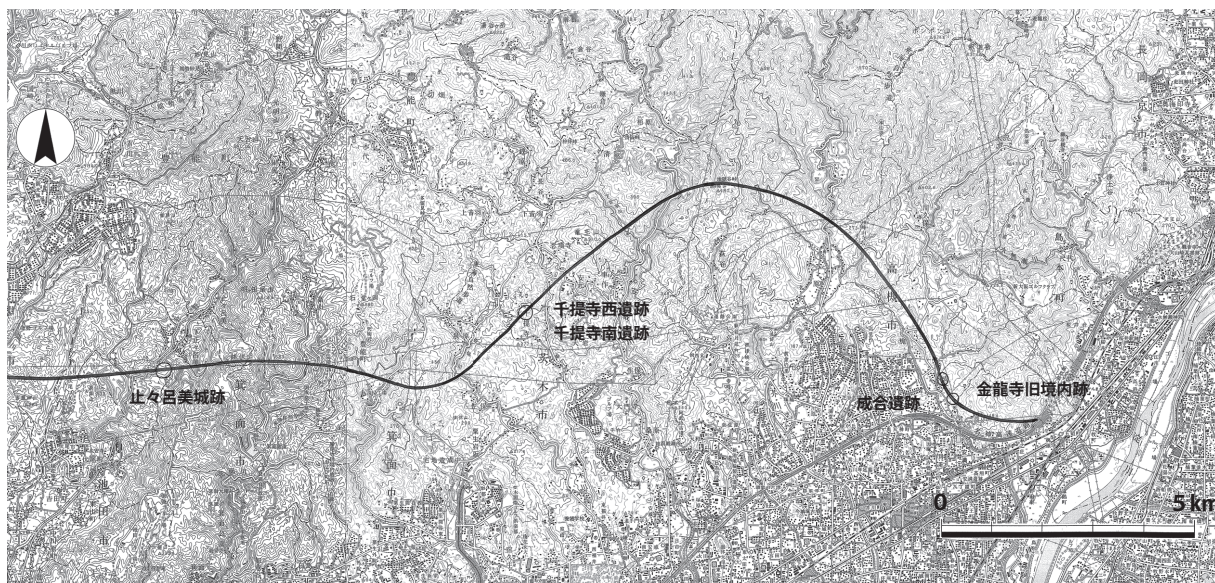


図1 新名神高速道路建設計画概念図



写真1 2～6調査区全景



写真2 横穴式石室の実測作業



写真3 1調査区の尾根（北東から）



写真4 現地立会の様子

った。また9月20日は、株式会社かんこうに委託して、古墳墳丘部分の航空測量を実施した。

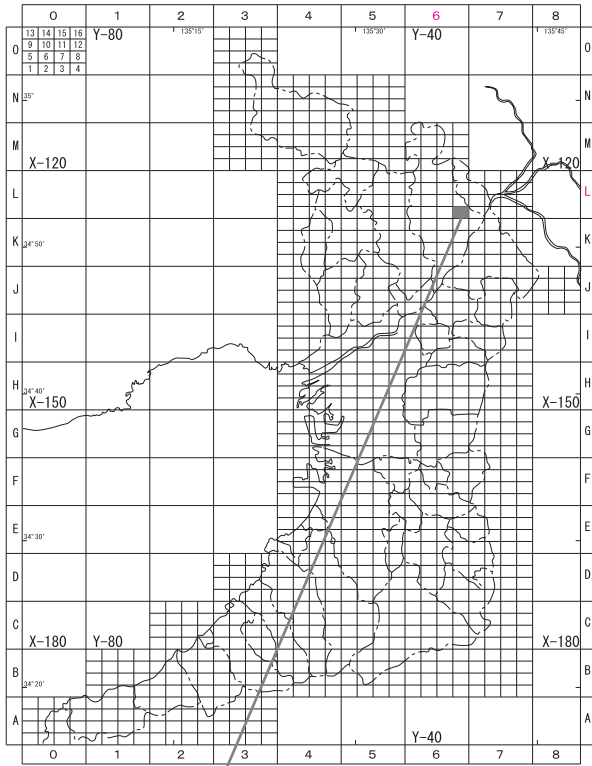
（2）調査地とトレンチの設定

調査は、大阪府教育委員会の立会の下、昨年度の確認調査において古墳時代の遺物が出土したトレンチに近接する尾根上のマウンド部分およびその周辺に6つの調査区を設定して行った。設定された調査区は、北摂山地から派生した南西に突き出た2つの近接する尾根部分に位置している。当初、1調査区では土坑・ピットなどの遺構と古墳時代後期の横穴式石室の可能性が高い石列が確認された。2調査区では遺構は確認されなかったが、古墳時代後期の須恵器片・埴輪片が確認されている。このため、1調査区の横穴式石室の調査を行うとともに、2調査区では丘陵上部に3～6調査区を設定し遺構の確認を行った（図2）。

（3）調査区の設定方法と概要

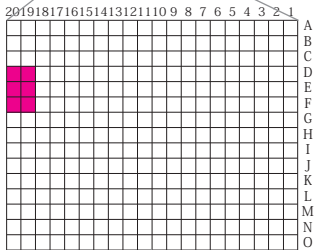
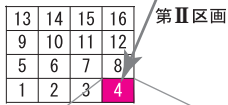
調査は、当センターが定めた『遺跡調査マニュアル』2010に沿って実施した。現地調査では、調査区を平面直角座標系（世界測地系）に基づく地区割法を用いて分割し、検出遺構や出土遺物の管理に用いた。各調査区では、XY座標点および水準点を設置し、これを測量基準点として一辺10mの座標グリッドを設定した（図2参照）。

設定されたグリッドでは、第I区画から徐々に細分された第V区画までを定めている。第I区画とは、大阪府の南西端 $X=-192,000\text{m}$ 、 $Y=-88,000\text{m}$ の交点を基準として、南北6km、東西8kmの面積で府域

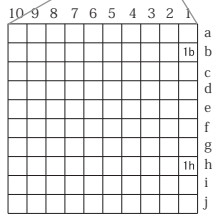


■ 部分は当該区画の調査区的位置

第I・II区画



第III区画



第IV区画

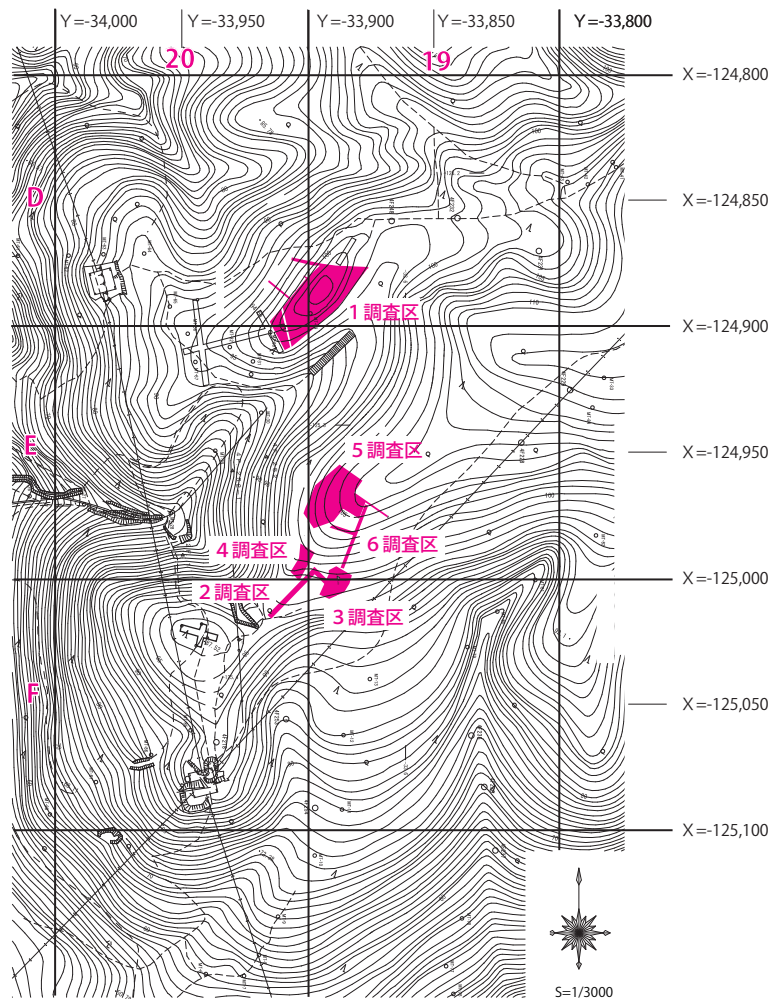


図2 調査地の位地と区割り

を62分割した区画を言う。このうちの1区画をさらに南北1.5km、東西2.0kmの範囲で各々4分割し、計16区画としたもののひとつを第Ⅱ区画とする。さらにこの第Ⅱ区画を南北に15分割、東西に20分割した一辺100mの範囲を第Ⅲ区画とし、さらにこれを東西、南北ともに10分割した一辺10mの範囲を第Ⅳ区画とする。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画を5m単位で分割した区画である。

今回の調査地は、第Ⅰ区画が「L6」にあたる。第Ⅱ区画は、「4」の範囲に含まれており、第Ⅲ区画、第Ⅳ区画はそれぞれ図3の通り分割される。なお今回の調査では、第Ⅳ区画までを使用し、第Ⅴ区画は適用していない。ただし、現地調査においては、範囲も小さかったため、遺物は調査区内出土位置の特徴を記し、出土遺構や層位、遺構面などを記入したラベルとともに取り上げ、登録番号を付している。

調査は、現地における立会により調査範囲およびトレンチを設定した後、人力掘削にて表土・腐植土層の除去を開始した。ただし、1調査区の後述する古墳墳丘部については、尾根筋とともに尾根に直交する形で表土から土層観察用アゼを残して調査を行った。このほかの部分では表土除去後に土層観察用トレンチの掘削を行った。調査においては、基本的に表土・腐植土を除去した面を第1面として検出しているが、遺構等の有無などにより、写真撮影や測量などを行っていない場合がある。この場合、直下の上層からの影響により土壌化してしまっている層を除去した段階を第1面として取り扱った。ただし、今回の調査では、多くの地点では表土・腐植土層を除去した段階で地山と考えられる基盤層が露出した。また、必要に応じて深掘トレンチを掘削して、下層の確認を行った。調査過程では古墳墳丘などの確認も含めて土層観察用トレンチを追加で設定し掘削を行った。

記録作業は、平板を用いて縮尺1/100の検出遺構・地形の測量を行った。また、土層観察用トレンチについては、縮尺1/20の断面図を作成している。検出された遺構については縮尺1/10の縮尺率を基本として、遺物や石等の出土したものについては平面図・断面図を、出土していないものについては断面図を作成している。ただし、埋葬施設等の規模の大きなものについては縮尺1/20で平面図・断面図等を作成している。また、埋葬施設内床面については、時間短縮と再現性の高い情報を得るために三次元レーザー計測器を用いて測量を行った。これにより作成した画像をトレースして作図している。

また、調査においては、1調査区に古墳が検出されたことによって、墳丘等の正確な記録を必要としたため、この部分のみ航空測量を実施した。航空測量は、ヘリコプターを使用し、縮尺1/400で撮影し、縮尺1/50で図化を行った。

整理事業は、出土した遺物については洗浄・乾燥の後、マニュアルに従って登録台帳を作成している。遺物については、出土遺物の登録番号を注記し、接合の可能な遺物については接合作業を行っている。その後図化可能な遺物を抽出し、実測を行った。出土した埴輪については、いずれも細片の為、突帯部分を中心に抽出を行い、断面の実測と採拓をおこなった。鉄器類については、X線撮影を行い、これについては写真図版に掲載している。写真は、4×5判モノクロフィルムならびに6×7判モノクロフィルムにて撮影をおこなった。また巻頭カラーに使用した遺物の集合写真については、当センターにてデジタルカメラを用いて撮影を行っている。また、写真図版等に掲載した遺構写真は、当センターでスキヤニングを行い、色調調整等を行って、写真図版に掲載した。

図書類は図面ファイルに収納した。写親類は、マニュアルに従ってネガ・ポジなどのアルバム、スライドファイル等に収納している。遺物は、遺物収納用コンテナに報告書掲載遺物と未掲載遺物に分けて遺跡名・報告書などの記載されたラベルを貼り付けて収納している。

第2章 遺跡の立地と環境

1) 地理的環境

金龍寺旧境内跡は、大阪府の北東部の三島地域といわれる地域に位置する。行政区画では、高槻市の東部、成合に所在する遺跡である。当遺跡の所在する高槻市成合は、高槻市東部に位置し北摂山地が張り出した丘陵に挟まれた小盆地の地形で、北をポンポン山山塊の南端部、東を安満山、西を高槻丘陵に挟まれた谷底平野である。

北摂山地は、古生層である丹波層群によって構成され、周辺部の丘陵地帯は大阪層群によって形成されている。成合盆地は標高 20～50m の南流する檜尾川に沿って南北に細長い地形である。金龍寺旧境内跡は、この安満山とポンポン山山塊に挟まれた谷筋の北部側の丘陵南裾に位置する。成合の集落は、この谷底平野の自然堤防状の微高地に広がり、背後の丘陵部に金龍寺旧境内跡および、北接する成合遺跡が所在している。

2) 歴史的環境

高槻市域は、古くから北摂山地南側を東西に走る古代の山陽道、近世には西国街道が通り、南を流れる淀川とともに水陸の交通の要衝である。高槻市域の遺跡を考えるにあたっては、北摂山地から淀川に注いでいる檜尾川・芥川・女瀬川の河川によって4つに分割されて語られることが多い。これに茨木市域の安威川を加えて、この流域に沿って遺跡が展開していることが明らかとなっている。今回の調査地は、このうち檜尾川流域にあたる。

[旧石器時代～縄文時代]

旧石器時代の遺跡としては、丘陵部から段丘域に、瀬戸内技法によるナイフ形石器を主体とする郡家今城C地点をはじめとして、いくつかの遺跡が知られている。縄文時代の遺跡としては、中期以前は遺跡数も少なく少量の土器がみられる程度であるが、後期の芥川遺跡では居住域のほか土坑墓や土器棺墓からなる墓域が確認されている。この時期以降、遺跡数も増加する傾向にあるが、晩期の船橋式から長原式にかけて遺跡数が飛躍的に増加している。

[弥生時代]

弥生時代になると、当遺跡の所在する檜尾川下流に有数の拠点集落と考えられる安満遺跡が出現する。安満遺跡は、東西 1.5 km、南北 0.6 km の範囲におよび、面積は 900,000 m²を測る。居住域・生産域・墓域などが展開したことが知られ、前期には居住域の周りに環濠が数条めぐっていたことが知られている。遺跡は後期になると衰退したと考えられているものの、前期から中期にかけて三島地域の中心的な集落である。また後期には、安満遺跡の北側の成合谷の入口部分の西側の丘陵に、高地性集落である古曾部・芝谷遺跡が営まれ、これに続いて萩之庄遺跡や紅茸山遺跡などの遺跡が営まれる。

[古墳時代]

古墳時代初頭になると、安満山の中腹の尾根上に中国・魏の年号「青龍三年(235)」銘方格規矩鏡や三角縁神獸鏡を含む青銅鏡5面、ガラス小玉1,600点、鉄刀・鉄斧などが副葬されたことで著名な安満宮山古墳が築かれる。墳丘は、一辺20mほどの長方形墳で、南に史跡安満遺跡、その南側には淀川と大阪平野を一望する雄大な景観が広がる立地の墳墓である。3世紀後半の築造と考えられ、古墳時代開始期前後の三島地域を考える上で重要な墳墓である。



図3 遺跡周辺の地形と歴史的環境（黒塗りは、今回の調査地）

高槻市域では、古墳時代前期後半に芥川右岸の奈佐原丘陵に弁天山古墳群が築かれるなど前期から数多くの古墳が築かれる。この地域を中心とする墳墓は、この芥川流域を中心に各時期の古墳が展開するが、安満山付近でも規模等は劣るものの、秋之庄古墳や紅茸山古墳群などが古墳時代前期から中期にかけてみられる。

古墳時代後期になると、この地域には真の継体大王陵と考えられている今城塚古墳が芥川右岸に築かれる。この時期には高槻市域の丘陵上に塚原古墳群・塚脇古墳群などの大規模古墳群が築かれ、安満山付近においても安満山古墳群や梶原古墳群など群集墳が築かれている。高槻市地域は北摂津地域でも大規模な群集墳の集中する地域で、塚原古墳群では 110 基、塚脇古墳群でも 50 基を数え、安満山古墳群においても 40 基を数える。このうち当遺跡に近接する安満山古墳群は、6 世紀中頃から 7 世紀前半にかけての群集墳で、開発に伴って 6 基の古墳が調査されている。

この地域は、こうした比較的大規模な群集墳のほかに、平野部に面した丘陵上に数基で構成される古墳群がみられる地域である（森本 2000）。また、地域の特徴として古曽部遺跡でみられるような単独立地の小型の横穴式石室墳がみられる。現在調査の進行している北接する成合遺跡でも、同一丘陵から終末期の小型の横穴式石室墳が 2 基確認されている。これらの古墳は、いわゆる後期の首長墓などにみられる単独墳とは相違し、群集墳における各古墳と同様な規模・副葬品等を持つものである。今回報告する古墳を考える上で興味深い。

[古代]

古代には、先述のように山陽道がこの地域を通る。芥川左岸の嶋上郡衙跡は、奈良時代から平安時代にかけての郡衙で郡庁院や郡寺が確認されている。このほか、安満山南麓には正倉院文書にも記述のみられる東大寺へ瓦を供給した梶原窯跡が営まれている。この時期になると東の島本町域から高槻市域・茨木市域にかけての平野部に条里地割が施工されたと考えられ、その地割が現在まで良好に遺存している地域である。

金龍寺は、高槻市東部を北から南流する檜尾川の東に位置する安満山丘陵の谷奥部、高槻市成合地内に位置した天台宗の山岳寺院である。寺伝では、延暦 9 年（790）に参議阿部是雄が成合の邂逅山に建立した邂逅山安満寺が前身とされている。康保元年（964）、僧千観が寺を再建し、寺号を邂逅山金龍寺紫雲院と改めたとされる。『日本紀略』には、金龍寺は平安時代を通じて摂津国衙から毎年千束の稲を供給されていたことが記載されている。また、千観や 11 世紀の歌人で高槻市古曽部に居を構えた能因法師にゆかりの深い桜の名所として、多くの文人に親しまれた。しかし、天正年間（1573－92）、高山右近の兵火により寺は焼失。その後、豊臣秀吉・秀頼により復興され、江戸時代以降には花見、茸狩りの名所として地域住民に親しまれた様子が『攝津名所図会』などにも掲載されている。しかし、明治期に無住となり、昭和 58 年（1983）に火災により本堂は焼失した。現在は、谷間を登るハイキングコースとなっているが、礎石などを残すのみである。

[中世～近世]

中世には、高槻市域に上牧遺跡などが知られ、高槻市域の平野部でも平野部の耕地の拡大が図られていたことが知られる。この時期には、三好山に築かれた芥川城や高槻城などが築かれ、近世初頭にかけての動乱の時代にたびたび歴史の舞台となっている。芥川城は、天文 22 年（1553）には三好長慶が永禄 3 年（1560）に飯盛山城に移るまでの 7 年間にわたり地域支配の拠点となっていた。また、高槻城は、キリシタン大名として名高い高山右近が治めた城として知られ、天下統一を進めた織田信長や豊臣秀吉、そして関ヶ原の戦い（1600）以後は徳川家康の直轄するところとなり近世城郭が造られた。近世以降には、京都・大阪を結ぶ水陸両運の要地として歴史を刻んだ地域である。

第3章 調査の成果

(1) 1調査区—第1面の調査成果—

1調査区は、成合集落東側の北摂丘陵から派生した支尾根先端部に位置する調査区で、北半にマウンド状の頂部があり平坦面を形成している。このほかの尾根部分も、比較的平坦で、比較的幅の広い地形であった。昨年度の確認調査によって調査区北側のトレンチから古墳時代の須恵器片が確認されており、周辺に古墳の存在する可能性が指摘されていた。

◆基本層序

第1層 表土・腐植土層

第2層 土師器・陶器・陶磁器を包含する古土壌。10YR5/6～6/6などの黄褐色の小礫を多く含むシルト～細砂の層である。後述する古墳墳丘であるマウンド上部分を含む尾根上部に堆積する層である。尾根上部の崩落や古墳の盗掘、古墳墳丘の削平やマウンド部分の整地などによって生じた土壌で構成されていると考えられる。

第3層 弥生土器・土師器・陶器・陶磁器などを包含する古土壌。10YR4/4～5/6などの極粗砂～小礫を含むシルト～細砂の土層である。第2層と同様に尾根上部の崩落や古墳の盗掘、墳丘の削平やマウンド部の整地などによって生じた土壌である。

第4層以下 基本的には、人為的営為によって形成されたものではない斜面堆積物と考えられる層である。尾根西側では極粗砂～礫などを多く含むシルト～細砂などの部分的にラミナ状の堆積もみられる斜面堆積物の層である。また尾根東側では、表土直下で基盤岩層や基盤岩の崩落による斜面堆積物の層である。尾根西側では、第3層との区別が難しい部分もみられたが、遺物は出土していない。

また、後述する古墳墳丘に関しては、西側の部分的に堆積した第3層の土層下面で、弥生時代と考えられる遺物を含む16溝が検出された。このことから、第4層下面以下は古墳造営より古い時期の堆積と考えられる。この層上面が古墳造営段階の墳丘面と考えている。

今回の調査にあたっては、マウンド部分に土層観察用のアゼを残し土層を観察したほか、丘陵尾根部に直交するトレンチを掘削し、斜面の堆積状況を確認した。丘陵尾根部や斜面部分では、数層の遺物を含む土層（第2・3層）や、後述する墳丘を構成する層がみられた。第2層下部には、遺物を包含する土層（第3層）が部分的に存在したため、これを除去して第1面の検出を行った。第3層下部には基盤層の明褐色のシルト～細砂を主体とする基盤岩や拳大以下の円礫を含む層が広がっている。表土・腐植土層、第2・3層掘削中には、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器などが出土している。これらの遺物は、後述する古墳墳丘を削平した段階に混じったものが含まれているものと考えられる。

◆検出した遺構

第2層を除去した丘陵頂部の平坦面では、隅丸方形の落ち込み1基、土坑3基やピット6基が検出されている。また、南側の丘陵尾根部分で焼土遺構1基が検出された。一部の土坑では瓦片や炭化物などがみられたが、このほかには出土遺物は僅かである。このほかにも、近年の攪乱と考えられるピット状の落ち込みや腐敗した樹木根によって形成された穴などがみついている。

[1ピット] 図6

直径0.3m、深さ0.12mの円形のピットである。褐色の埋土である。遺物は出土していない。

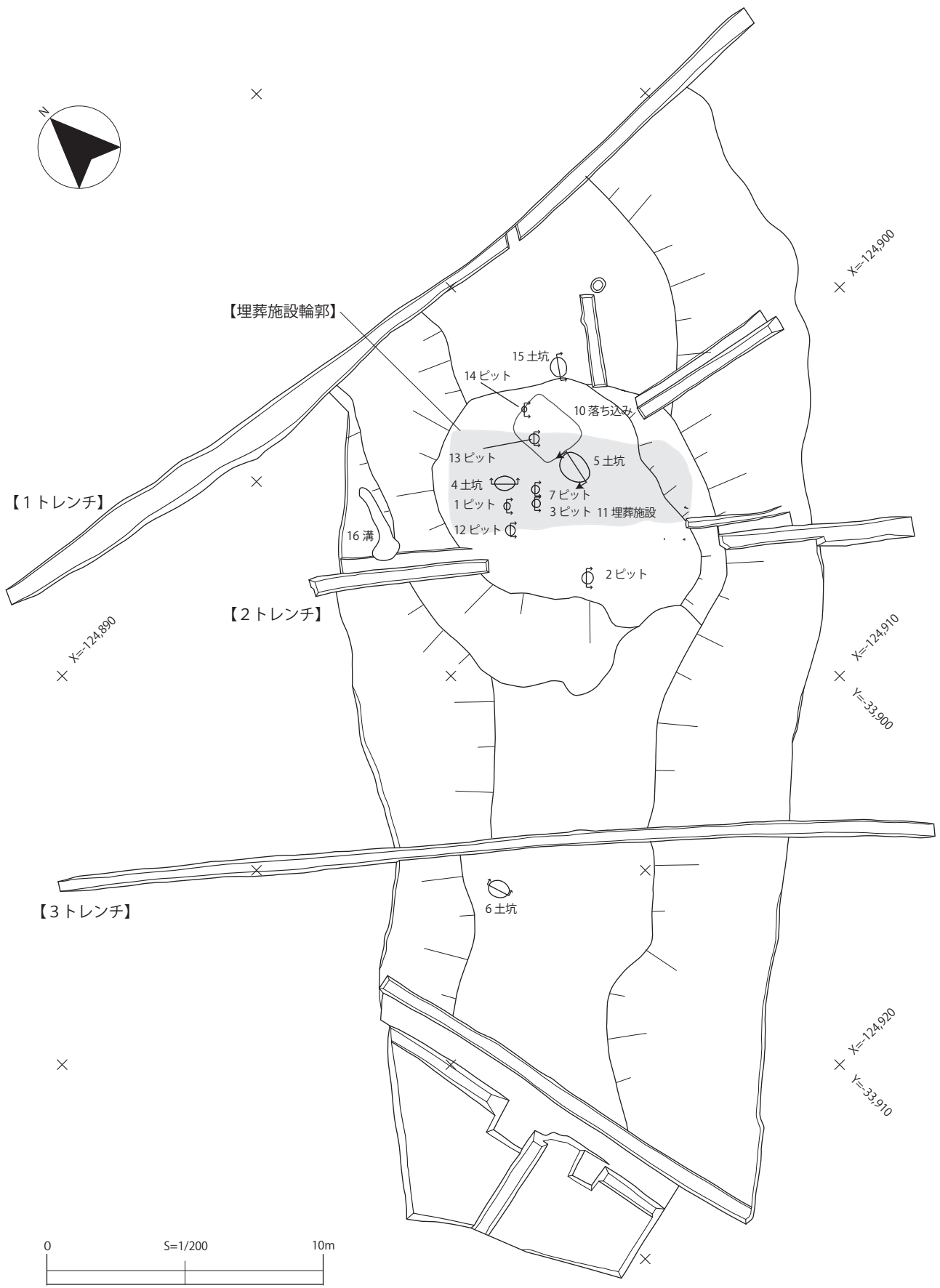


図4 1 調査区 第1面平面図



図5 1調査区 基本層序断面図

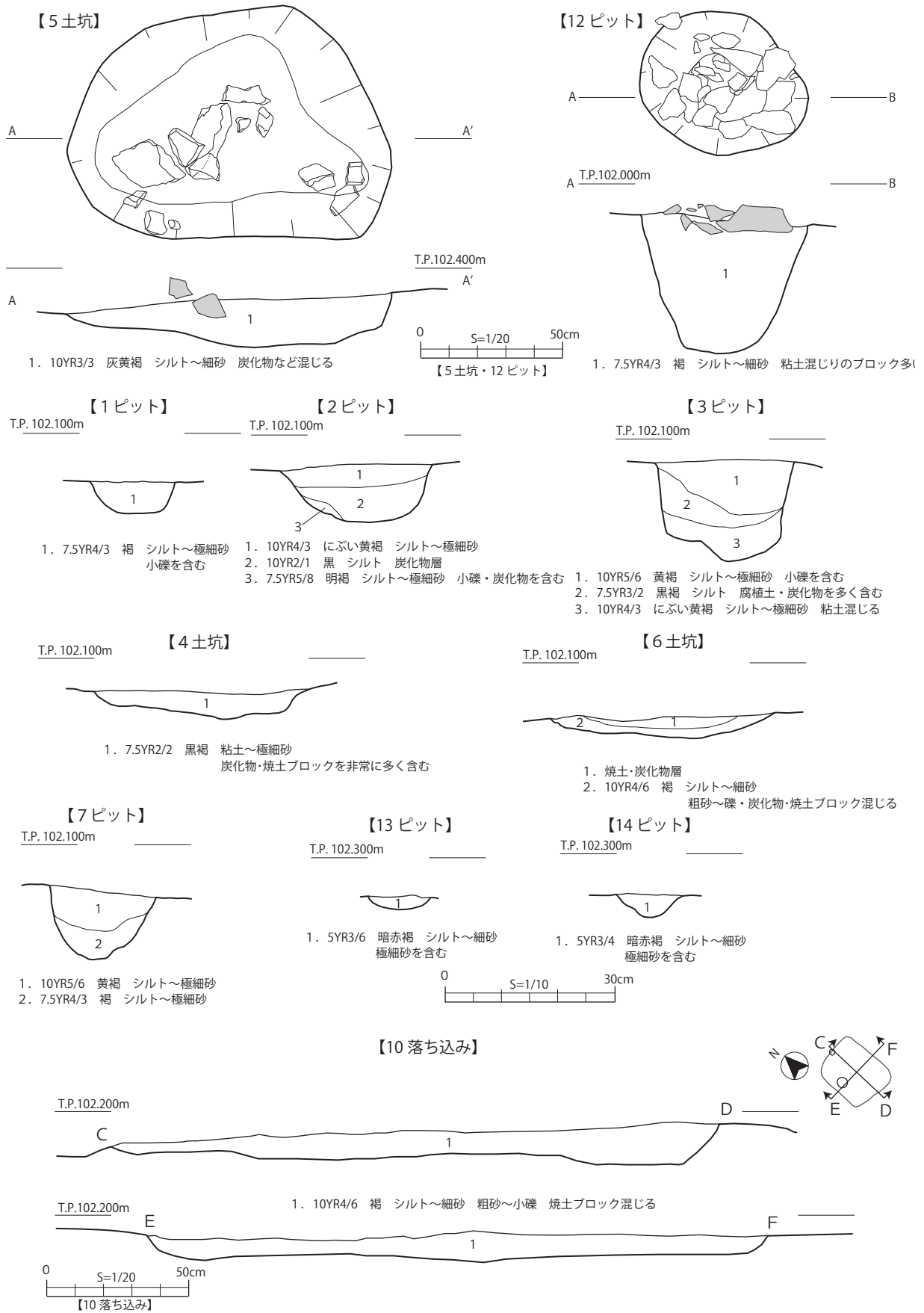


図6 1調査区 検出遺構平・断面図(1)

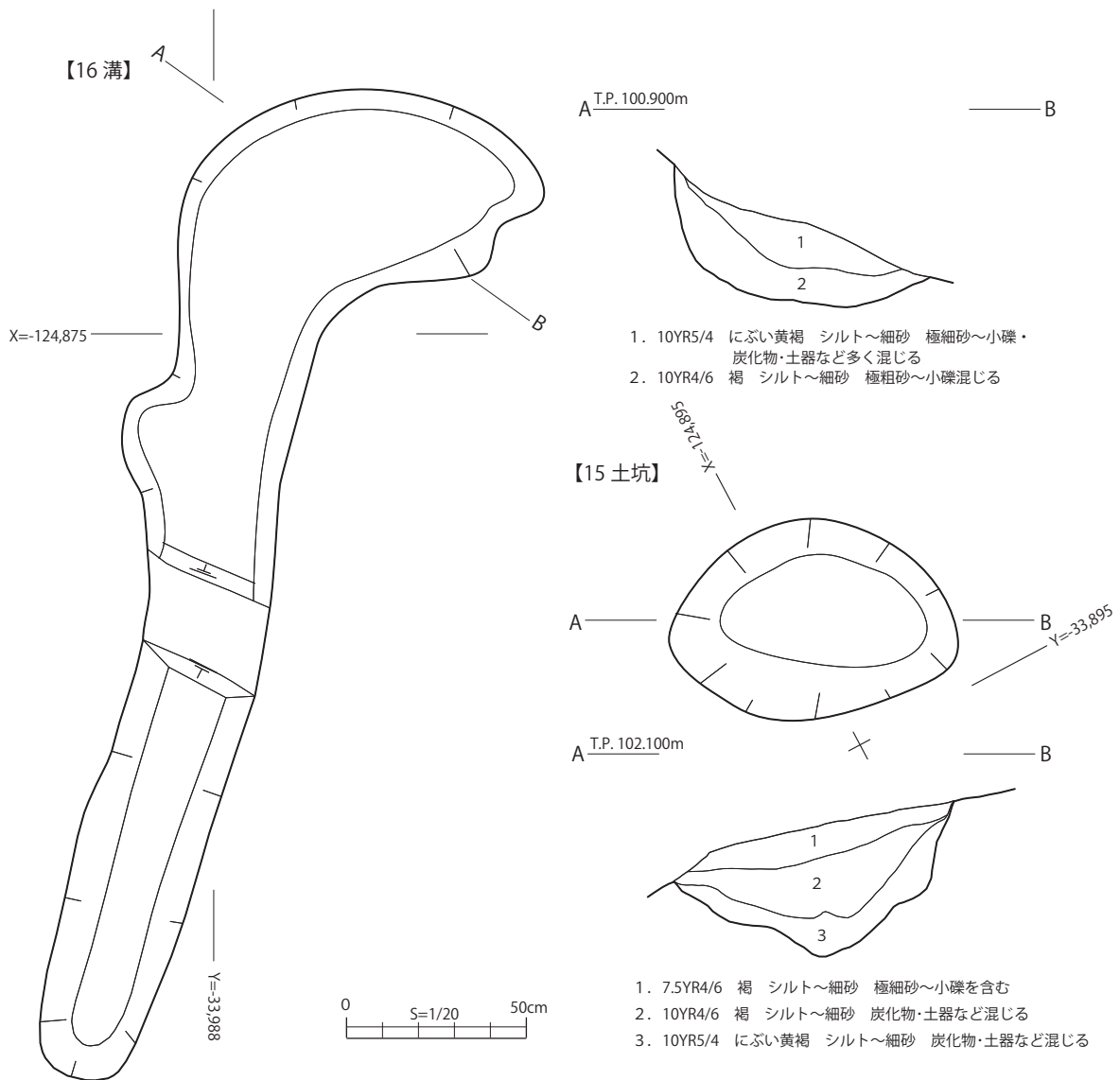


図7 1調査区 検出遺構平・断面図(2)

【2ピット】 図6

直径0.52m、深さ0.21mの円形のピットである。埋土は3層に分層された。第2層が黒色の炭化物層であることを考えると、ピットを掘削し、何らかの理由で火を焚きその後に埋め戻したものと考えられる。遺物は出土していない。

【3ピット】 図6

直径0.48m、深さ0.46mの円形のピットである。埋土は3層に分層された。第2層が黒色の炭化物を多く含む層である。2ピット同様に、火を焚いた痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

【4土坑】 図6

長軸0.76m、短軸0.50m、深さ0.1mの楕円形の土坑である。埋土は1層で、床面の一部が焼け焦げていた。2・3ピット同様に、火を焚いた痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

【5土坑】 図6-1・図版1-4

長軸1.14m、短軸0.87m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。暗褐色の炭化物などの混じる層である。埋土中から拳大の礫や丸瓦片が出土している。

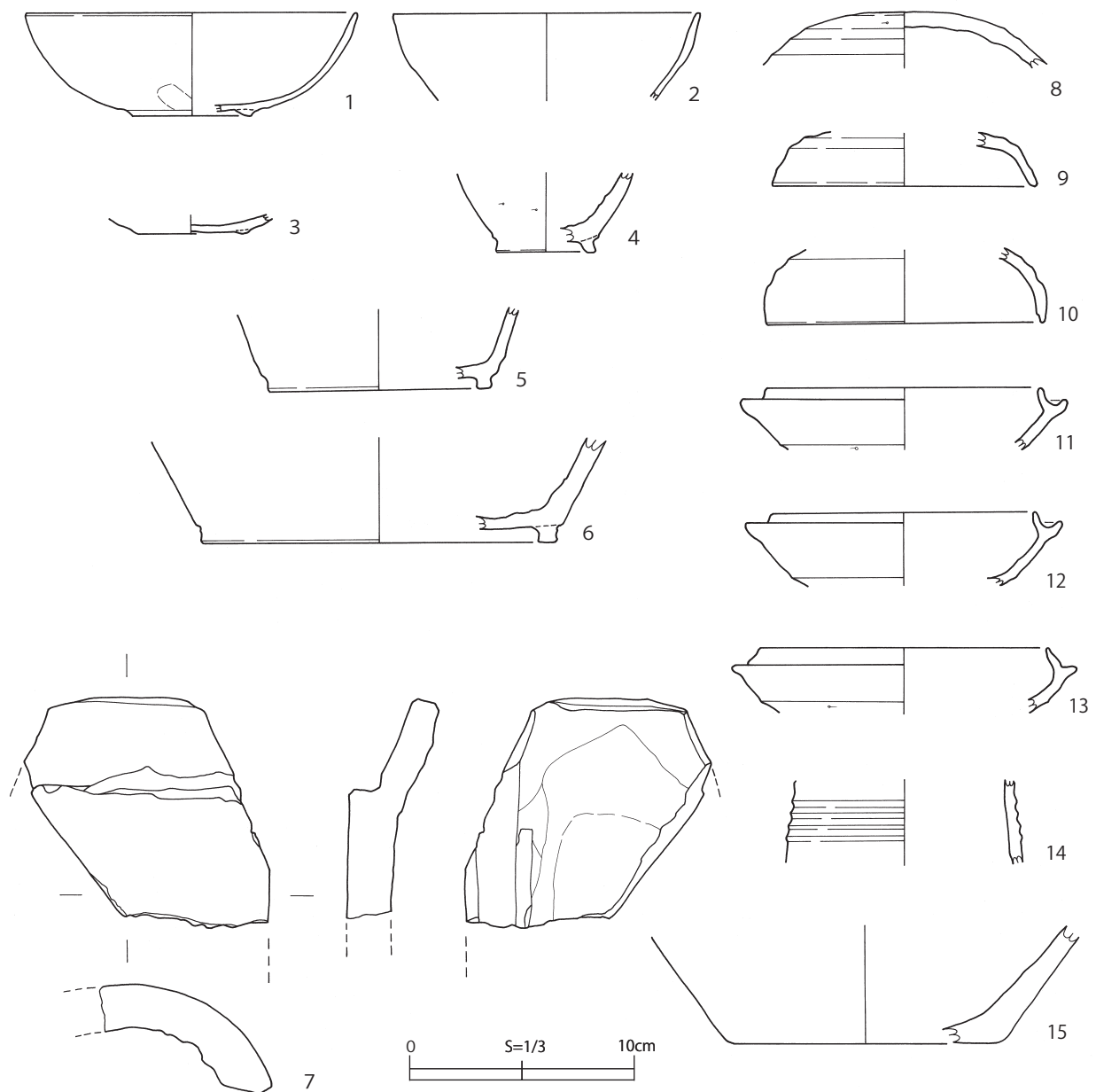


図8 1調査区 出土遺物実測図

[6土坑] 図6

長軸0.77m、短軸0.5m、深さ0.08mの楕円形の土坑である。埋土は2層に分層され、焼土や炭化物で構成されており、火を焚いた痕跡であろう。遺物は出土していない。

[7ピット] 図6

直径0.38m、深さ0.25mの円形のピットである。埋土は2層に分層され、黄褐色～褐色の埋土である。遺物は出土していない。

[10落ち込み] 図6

東西2.17m、南北2.3m、深さ0.1mのやや歪んだ隅丸方形の落ち込みである。褐色の埋土で、炭化物や焼土が多く混じっていた。弥生土器と考えられる土器片が数点出土している。

[12ピット] 図6

直径0.59m、深さ0.47mの円形のピットである。検出面では、拳大以下の小振りな石多数が埋土上

部に含まれていた。粘土混じりの褐色の埋土である。遺物は出土していない。

[13 ピット] 図6

直径 0.22m、深さ 0.06m の円形のピットである。10 落ち込みの埋土上面で確認されたピットである。暗褐色の焼土層の埋土である。焼き火等の痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

[14 ピット] 図6

直径 0.24m、深さ 0.08m の円形のピットである。10 落ち込みを切る形で掘り込まれている。暗褐色のシルト～細砂の埋土である。遺物は出土していない。

[15 土坑] 図7

長軸 0.8m、短軸 0.6m 程度、深さ 0.38m の楕円形の土坑である。上部が、土壌化の影響で確認が非常に難しかった。埋土は 3 層に分層され、褐色の炭化物などの混じる層で構成されている。埋土から、弥生土器と考えられる小片が出土している。

[16 溝] 図7

後述する古墳墳丘西側の斜面堆積物を除去した段階で、屈曲する溝状の遺構を検出した。本来、別途掲載すべき遺構であるが、ここで取り上げておく。規模は全長 2.83m、幅最大 0.55m、深さ 0.24m 程度である。埋土は 2 層に分層され、上層は砂粒や小礫などの多く混じる層で、この層から弥生土器の小片が出土している。竪穴住居などの周壁溝とも考えられるが、現状では遺構の性格は不明である。

◆出土遺物 図8

今回の調査において、第 1 層および第 2・3 層から出土した須恵器の一部の遺物は古墳に伴う遺物と考えられるが、層位的な対応から当節で掲載した。

出土した遺物は、いずれも小片で図化に耐えうるものはほとんどなかった。1～3 は、瓦器碗である。遺存状況の悪い破片資料で、器壁も摩滅して暗文も確認できなかった。1・3 などが退化した低く小さい高台を持つことを考慮すると、13 世紀以降のものと考えられる。4 は、須恵器の小壺である。外面に体部下部にケズリ調整を施している。5・6 は、須恵器の坏 B である。いずれも胴部中位での破片資料であるが、9 世紀代のものと考えられる。7 は、丸瓦である。堅緻なつくりで外面は滑らかな表面を持つものである。中世以降の資料と考えられる。

8～13 は、第 1～3 層を除去作業中に出土した古墳時代の須恵器の坏身・坏蓋の細片である。坏蓋は、口径 13 cm 程度のもので、口縁部と天井部の間には稜線もみられず、回転ヘラケズリ調整も及ぶ範囲が少なくなり、口縁端部も丸く仕上げられている。坏身の口縁部の立ち上がりも短く、外面のケズリ調整も中心部分の一部しか行われていない。TK43～TK209 型式のものであろう。

14 は弥生土器の細片である。残存部中位に凹線がみられる。付近から水差し形土器の把手の細片が出土している。このほか、出土遺物は細片がほとんどで、図化に耐えるものは出土していないが、近世の陶磁器片、瓦質の土器細片、古代の須恵器片、土師器片などが出土している。

◆まとめ

1 調査区第 1 面の調査では、時期の確定できる遺構は確認されなかった。包含層からは、弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世以降の遺物が出土した。このことから、当調査区付近において弥生時代以降の人間活動の形跡がみられた。金龍寺との関係については明らかではないが、同時期にこの付近で何らかの活動が行われことは明らかである。後述する古墳墳丘を破壊・削平する大規模な改変が行われていることは、この地域の開発史を考える上で重要なことと考えられる。

(2) 成合 1 号墳の調査成果

先述の第 1 面を検出した段階で、マウンド状部分の東南部に拳大～人頭大の石材を集積したような部分が確認された。当初、掘込みなどが確認できなかつたため、改めて精査をおこなった。また、加えて石材集中部には土層観察のためトレンチを掘削した(写真 5)。



写真 5 墓壙上面の石材(南西から)

結果、7.5 × 3.5m の規模を測る掘方と考えられる輪郭が確認された。土層観察用トレンチにおいても、0.4 ～ 0.6m 程度の深度を掘削した段階で、1.2m ほどの間を置いて 2 つの石材が確認され

た。このため、調査を継続し、南東部について全面を掘り下げた。これにより後述する羨道部にあたる長軸 70 cm 程度の石材が北東から南東方向に 2 列並んで検出された。掘削した埋土は、柔らかい土壌で拳大～人頭大の石が含まれていた。昨年度の調査や今回の周辺土層から古墳時代後期の須恵器片が若干検出されていることもあわせて考えると古墳時代の横穴式石室と判断された。このため、埋葬施設部分を全面的に掘り下げて調査を行った。

◆墳丘(図 5・図 10)

前段階の第 1 面の検出において、丘陵部分の斜面上層の斜面堆積物を除去している。丘陵尾根方向の東側については、先述のように部分的に第 1・2 層を除去した段階で基盤層が露出した状況であった(図 5・9)。また、尾根部東西の斜面については、東側は表土以外は第 3 層下部に基盤層がみられたためこの基盤層上面を墳丘面と認識した。墳丘西側では、調査範囲の斜面下部で部分的に堆積した第 3 層の下面で、弥生時代と考えられる遺物を含む溝が検出された。このことから、第 3 層下面以下は古墳造営より古い時期の堆積層と考えられる。また、現状から判断して第 3 層下面が古墳造営段階の墳丘面と考えられる。尾根方向については、丘陵上部に向かう北東方向はこの北東に鞍部となるやや平坦な部分に向かって僅かに低くなっていく地形であるが、墳丘裾部に若干の区画のためと考えられる周溝が掘削されている(図 5)。また、墳丘南西部については、墳丘裾部から 30m ほど緩やかに低くなりそこから急激に落ちる地形である。明瞭な周溝等の痕跡は確認できなかったが、このなだらかな部分を削平することにより盛土を盛った可能性があると考えられる(図 5)。しかし、現状では墳丘頂部は基盤層が露出した状況で、本来の墳丘を形成した盛土は削平を受けているものと考えられる。

墳形については、墳丘部分北側東の丘陵尾根方向では、基盤層面が直線的な部分がみられ、方墳の可能性も考えられた。また、墳丘南西側では、地形的に直線的に広がりを見せることから前方後円墳ではないかという指摘もあった。しかし、部分的に直線状を呈する部分はあるが、全体を通してみれば不整形ながらも緩やかな円形である。後述するように、時期的には 6 世紀後半代の古墳であり、古墳時代後期の群集墳には地形に左右されて均整な円形にならない古墳も多いことから直径約 15m 程度の不整形な円墳と考えている。

◆石室(図 11)

埋葬施設は、上面では樹木の根跡や上面の遺構等の攪乱のために盗掘等の痕跡などは確認することが

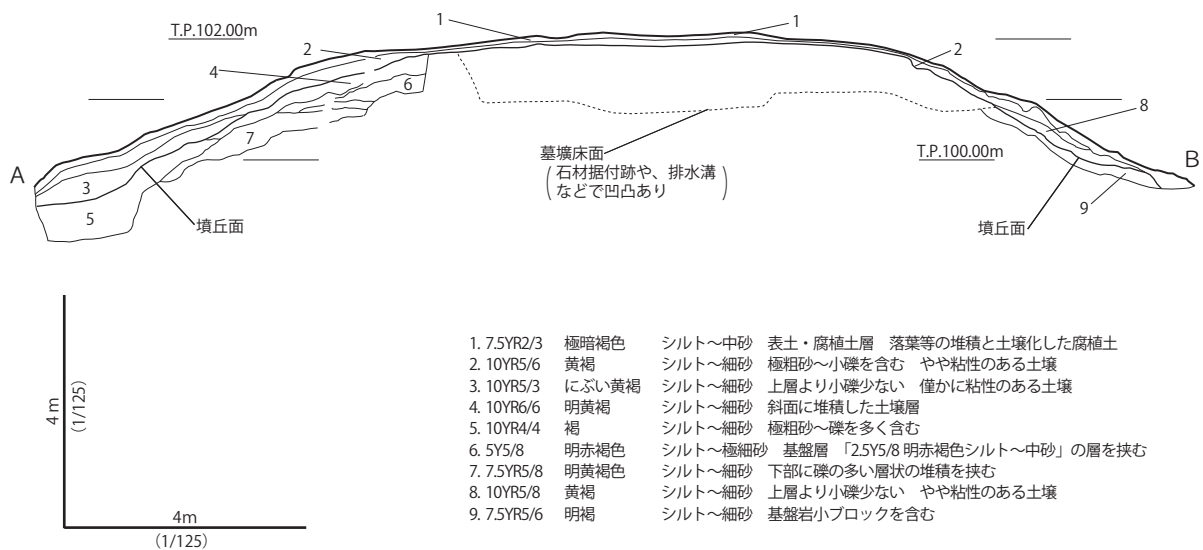


図9 墳丘部分南北断面図【2トレンチ】

できなかった。また、掘削したトレンチ断面も根跡等の攪乱で不明瞭であったことから、前段で石材を確認した深度まで全体の掘り下げを行った。この段階で、墓壇内の精査を実施したところ、盗掘坑と考えられる輪郭を検出した。この輪郭は、埋葬施設内全体に及んでいることから、石室石材と裏込の部分の境のラインという可能性も考えられた。ただし、その後埋土や床面検出段階の石材抜き取り後から瓦器碗片が出土している（図8-1～3）。この部分では遺構等はみつかっていないことから考えて、盗掘に伴う混入と考えられる。このことから、埋葬施設の盗掘時期は中世後半以降と考えられる。また、羨道部分の断面では上部がほとんど観察できなかったが、玄室部分に設定した埋葬施設横断面の観察から、当初石材検出面で確認した輪郭は石材抜き取り跡で、これより外側については石室裏込土が遺存していると考えられた。このことは、この輪郭が埋葬施設床面において石材据付痕跡の輪郭につながることも確認できる（図13）。

横穴式石室は、羨道部の第1段目の石材が良好な状況で確認された。玄室については左側壁の第1段目にあたる約2石が確認されたが、それ以外の石材は抜き取られて確認できなかった（図11）。規模は、石材の抜き取り跡を内法としての推定であるが、全長6.4m、玄室長3.4m・玄室幅1.4m、羨道長3.0m・羨道幅1.2m程度と考えられる。

平面形状は、羨道と玄室の境界部分の石材を境にそれぞれ南西に屈曲し弓形の形状を呈している。主軸は、玄室部分でN-47°-W、これに対して羨道部分はN-37°-Wである。また、床面検出時の精査で検出した石材抜き取り跡の状況から、玄室右側壁が後述する「柵石」側に膨らむことが明らかとなった。このことから、横穴式石室の平面形は右片袖式と考えている。

石室構築石材は、玄室部分にあたる石材は、石室で表面が横0.7m、縦0.6～0.7m程度、羨道部で横0.4～0.7m、縦0.4～0.5m程度のもの構成されている。玄室部分が2石しか遺存しないが、羨道部より若干大きな石を用いている。石材は、チャートを用いており、古墳の立地する丘陵部においても露頭等がみられるものである。後述する床面の敷石についても基盤層中にみられる円礫や角礫などを用いており、いずれも丘陵部において採集が可能なものと考えられる。

この石室では、羨道部と玄室の間に側壁に直交する方向の大きな平面長方形の石材が横たわっている。

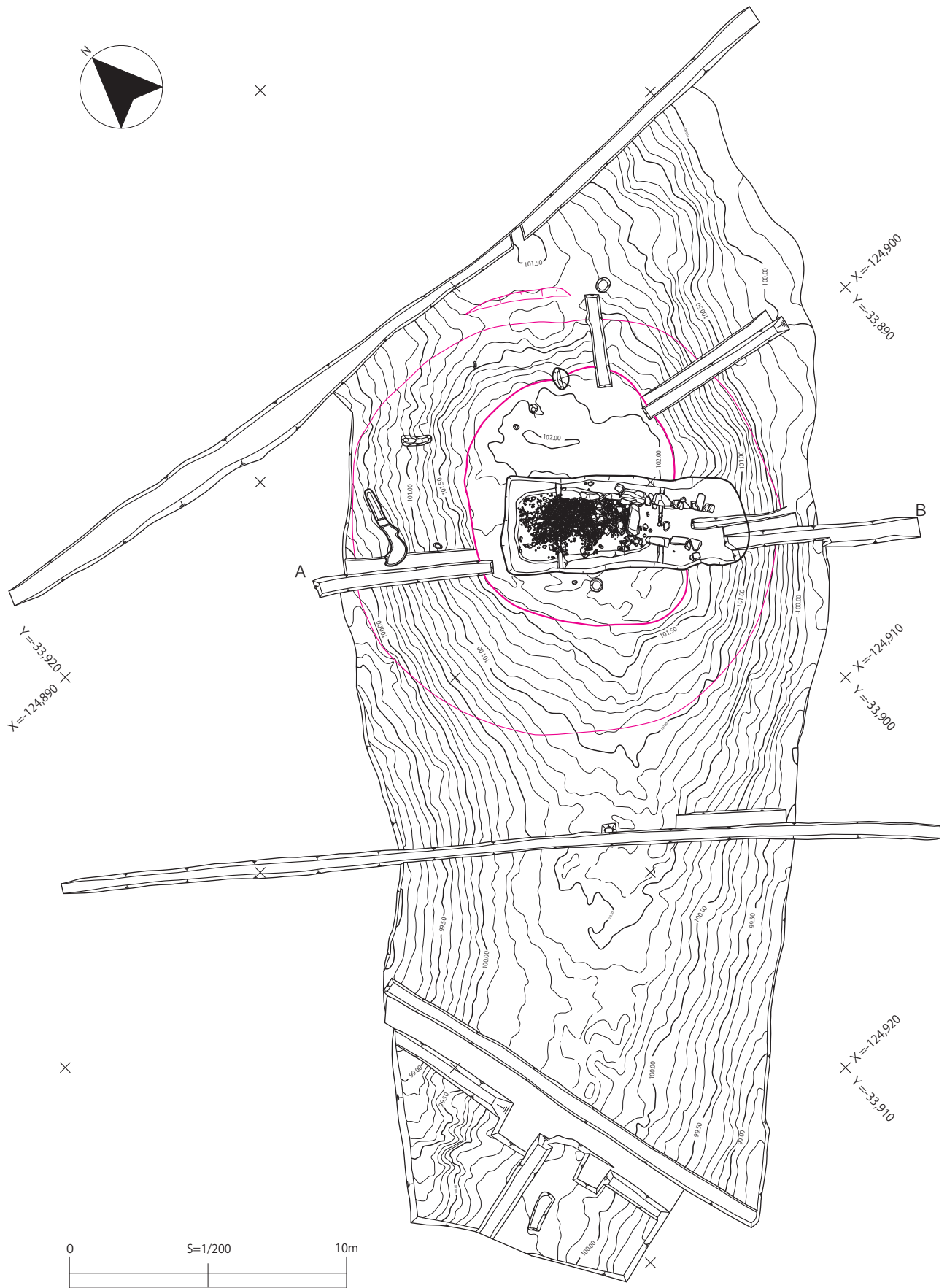


图 10 墳丘測量図

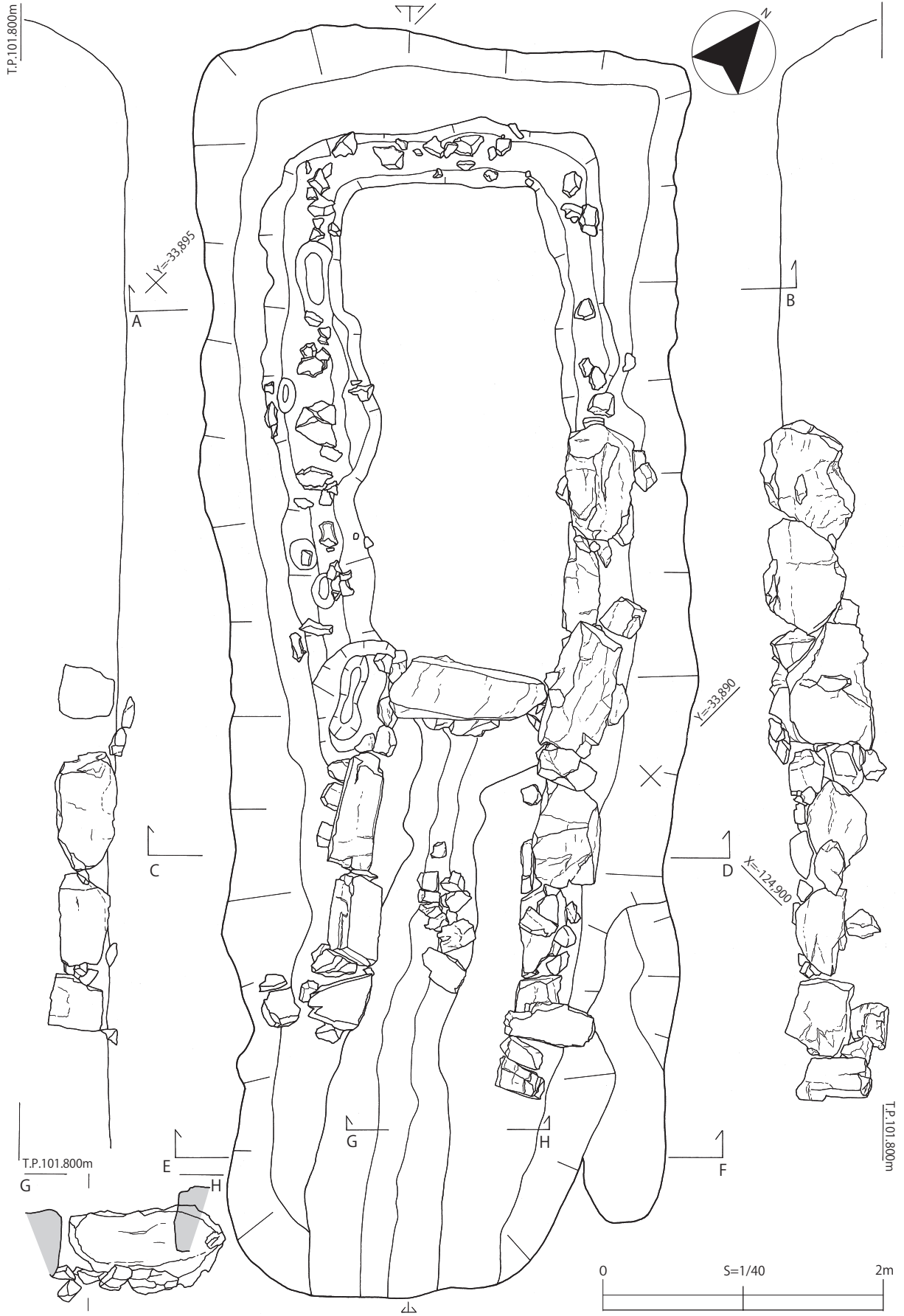


图 11 石室平面图

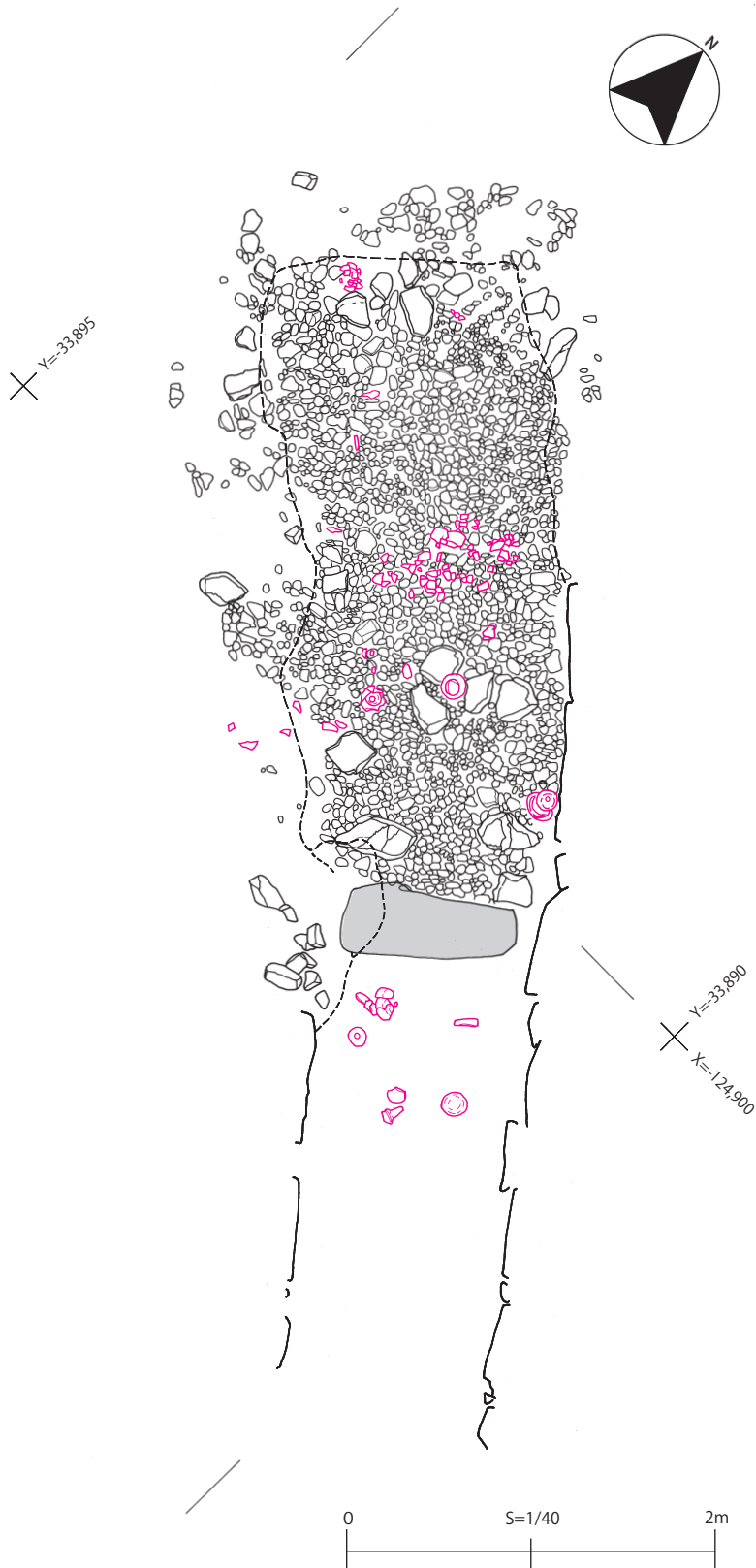


図 12 床面検出状況図

出された。礫敷は、墓壙掘方の上に2層の土壌を敷き詰めて、その上に礫を敷いている(図13)。

床面のレベルをみると奥壁よりから羨道側にかけて若干ではあるがレベルが高くなっている。また、「柵石」を境に羨道部については一段高い。

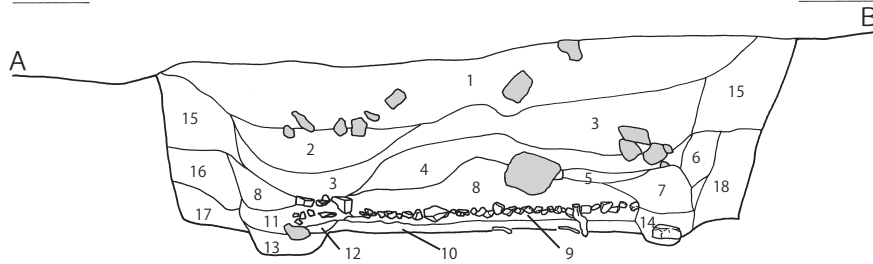
当初、奥壁石材の可能性や袖石が倒れた状態でみつかったものではないかと考えた。石材は、玄室主軸にほぼ直交する方向に据えられ、石材の高さが羨道部右側壁の1段目の石材とほぼ同程度の高さで、羨道部の内幅とほぼ同様なサイズである。また床面検出の段階では、玄室床面に敷き詰められていた礫敷きとの関係が注目された。これについては、当該の石材を動かした段階で床面の礫敷きが当該部分に及んでおらず、玄室部分で明瞭に終わること、石材の下部に据え付けるための小さな石材が2つ配置されていたことなどから考えて、当初から意図的に据え付けられていたと考えられる。この状況から考えると、当初から羨道部と玄室の間を仕切る「柵石」的な石材と考えられる。

石材除去後に墓壙加工面ならびに石材据付跡を検出したところ、墓壙掘削段階から玄室部分が羨道部より低いことが明らかとなった(図15)。また、羨道部の石材据付跡は左側壁の一部を除き確認できなかった。羨道部前面よりの石材には石材下部に盛土を施して高さの調整を行っていた。

◆床面(図12)

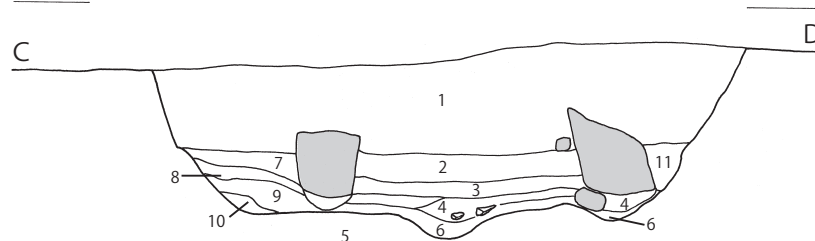
床面は、玄室・羨道ともに良好な状況で検出された。玄室床面には5cm程度の礫が敷かれている。遺存状況は、玄室右側壁部分から奥壁部分に近い部分が遺存していないが、玄室の7割程度の部分で床面が良好に検

T.P.102.000m



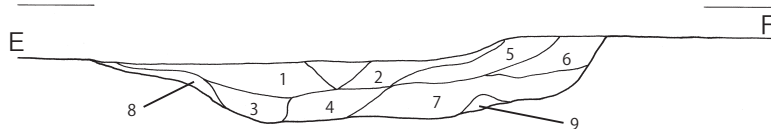
- | | |
|----------------------------------------|--------------------------------------------|
| 1. 10YR6/6 明黄褐 シルト～細砂 基盤層ブロック・拳大以上の礫含む | 10. 10YR6/4 にぶい黄橙 シルト～細砂 粘土を含み粘性強い |
| 2. 10YR5/6 黄褐 シルト～細砂 やや粘性があるシルト | 11. 10YR5/6 黄褐 シルト～細砂 粘性あり |
| 3. 7.5Y5/6 明褐 シルト～細砂 やや粘性あり | 12. 10YR5/8 黄褐 シルト～細砂 2.5Y7/4 浅黄の粘土粒が混じる |
| 4. 7.5YR5/6 黄褐 粘土～シルト 細砂～中砂を多く含む | 13. 10YR5/6 黄褐 シルト～細砂 |
| 5. 10YR5/8 黄褐 シルト～細砂 中砂混じる | 14. 10YR5/6 黄褐 シルト～細砂 10YR3/4 暗褐のシルト～細砂混じる |
| 6. 10YR5/6 シルト～細砂 基盤層ブロック混じる | 15. 10YR5/8 黄褐 シルト～細砂 基盤層ブロック含む |
| 7. 10YR4/4 褐 シルト～細砂 中砂混じる | 16. 10YR6/6 明黄褐 シルト～中砂 基盤層ブロック混じる |
| 8. 10YR6/6 明黄褐 粘土～シルト 細砂多く混じる | 17. 10YR6/4 にぶい黄橙 シルト～中砂 基盤層ブロック混じる |
| 9. 10YR6/6 明黄褐 シルト～細砂 粘土・中砂～粗砂を含み粘性強い | 18. 10YR5/8 黄褐 シルト～細砂 非常に小さい基盤層ブロック混じる |

T.P.102.000m



- | | |
|--------------------------------------------|--------------------------------------------|
| 1. 攪乱・崩壊のため不明 | 7. 10YR6/4 にぶい黄橙 シルト～細砂 極細砂～小礫含む |
| 2. 7.5Y5/6 明褐 シルト～細砂 やや粘性あり | 8. 7.5YR5/6 明褐 シルト～細砂 |
| 3. 10YR6/6 明黄褐 粘土～シルト 細砂多く混じる | 9. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト～細砂 基盤層ブロック含む |
| 4. 10YR5/6 黄褐 シルト～細砂 極細砂～小礫・基盤粗ブロック混じる | 10. 7.5YR6/6 橙 シルト～細砂 基盤層ブロック含む |
| 5. 10YR6/6 明黄褐 シルト～細砂 中砂～粗砂・基盤層ブロック・拳大の礫含む | 11. 7.5YR5/6 明褐 シルト～細砂 粗砂～極粗砂含む 基盤層ブロック混じる |
| 6. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト～細砂 やや粘性、基盤層ブロック混じる | |

T.P.101.400m



- | | |
|----------------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 10YR5/6 黄褐 シルト～細砂 極細砂～礫混じる 排水溝埋土 | 6. 10YR5/6 シルト～粗砂 極粗砂～小礫混じる 墳丘形成層 |
| 2. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト～細砂 基盤層ブロック・礫混じる 羨道床面形成層 | 7. 10YR5/8 黄褐 シルト～細砂 基盤層ブロック混じる |
| 3. 7.5YR5/6 明褐 シルト～細砂 基盤層ブロック混じる 排水溝埋土 | 8. 7.5YR5/6 シルト～細砂 基盤層 |
| 4. 7.5YR5/8 明褐 細砂～極細砂 排水溝埋土 | 9. 10YR6/6 シルト～中砂 基盤層 |
| 5. 10YR5/8 黄褐 シルト～細砂 極粗砂・基盤層ブロック混じる 羨道部分埋土 | |

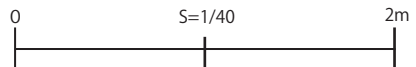


図 13 石室横断面図

羨道部分には礫敷きはみられなかったが、中央部に開口部に向けて排水溝と考えられる溝を掘削し、それを埋めて2層の土壌を敷き詰めて床面を構築している。排水溝には、羨道中央部付近に拳大よりやや大きい石材が0.5mほどの範囲に集中して出土しているが、全面に渡るものではない。

床面からは、人頭大よりやや小振りな石材9点が床面礫敷きの上から検出された。これについては、当初木棺の棺台等の可能性が考えられたが、石材の配置や石材の高さの不均衡などから考えて、棺台とは考えがたいと考えている。ただし、後述する須恵器短頸壺を囲んで出土した石材3点については、石材に挟まれて短頸壺が完形で正置されていることから、盗掘段階などに偶然に落下したものではない可能性が高い。壺の配置に関わる意識的な配置と考えている。

◆遺物の出土状況 (図 12・14)

玄室および羨道部の床面からは、破片も含めて須恵器 20 個体以上、土師器 2 個体、鉄製品 5 点、砥

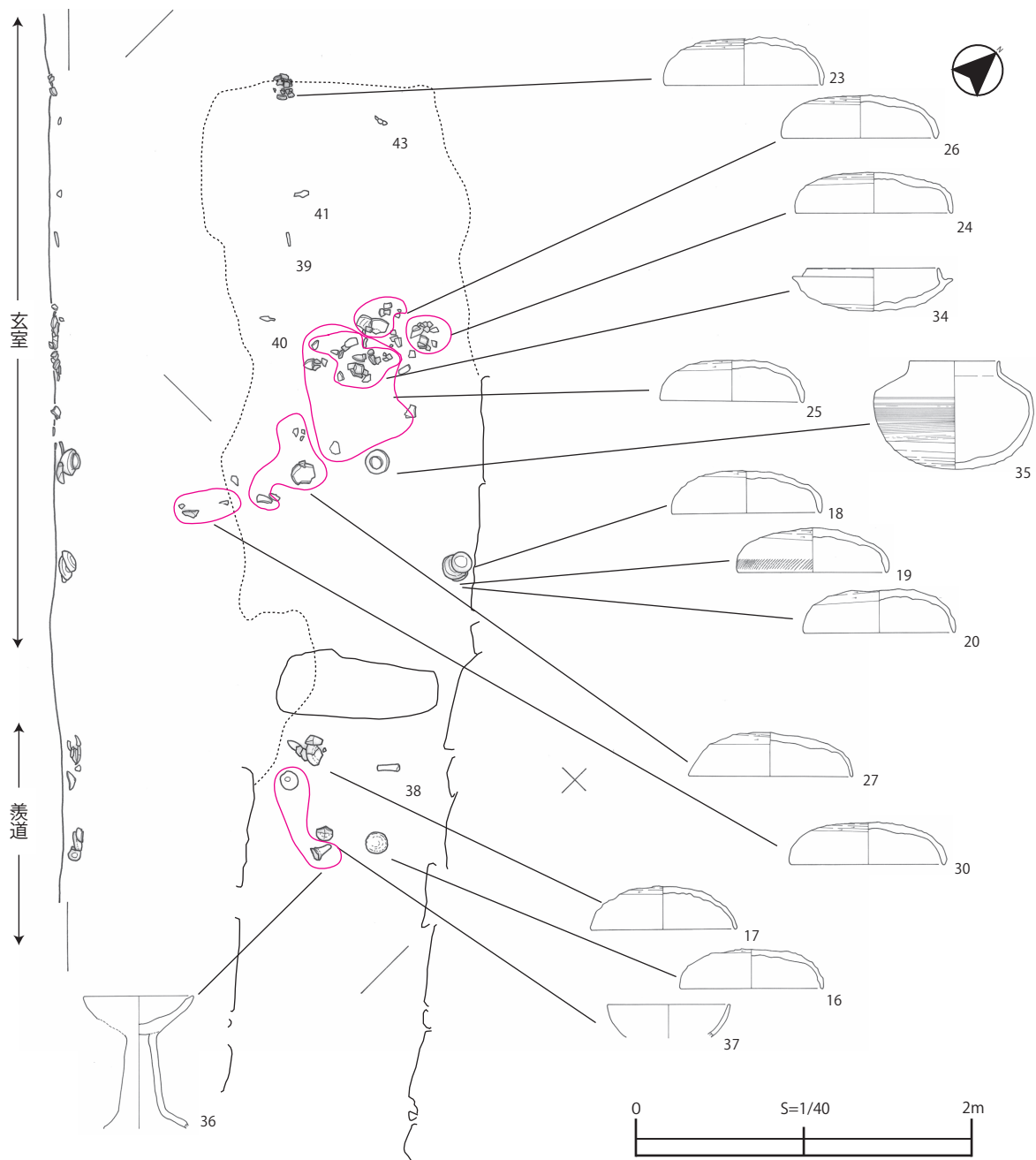


図 14 玄室および羨道の遺物出土状況

石 1 点が検出された。玄室では、入口付近の左側壁際から坏蓋 3 個体 (図 16 - 18・19・20) が重なって出土している。中央部からは、完形の短頸壺 (図 16 - 35) が大きな石にはさまれた位置で出土している。そのやや南西よりでは坏蓋 2 点 (図 16 - 21・27) が一部の破片のみではあるが出土している。玄室中央部のやや左側壁よりでは 4 個体分 (図 16 - 24・25・26・34) が破碎された状態で検出された。このほか、石室主軸付近の奥壁よりの位置から坏蓋 1 点 (図 16 - 23) が出土している。鉄製品は、玄室奥壁よりの左側から鉄鏃 1 点 (図 17 - 43) が出土しているほか、中央部の主軸寄りに刀子 2 点 (図 17 - 39・40) と鉄鏃 2 点 (図 17 - 41・42) が、それぞれ離れた位置から出土している。

一方、羨道部では完形の坏蓋が 1 点出土しているほか、破碎された状態で坏蓋 1 個体分が出土した。またその傍には土師器の高坏坏部 (図 16 - 36) が逆さま状態で出土し、約 0.35m ほど離れた位置にあった脚部と接合した。この脚部の傍から、ほとんど土に溶けた状態で土師器 (図 16 - 22) が出土

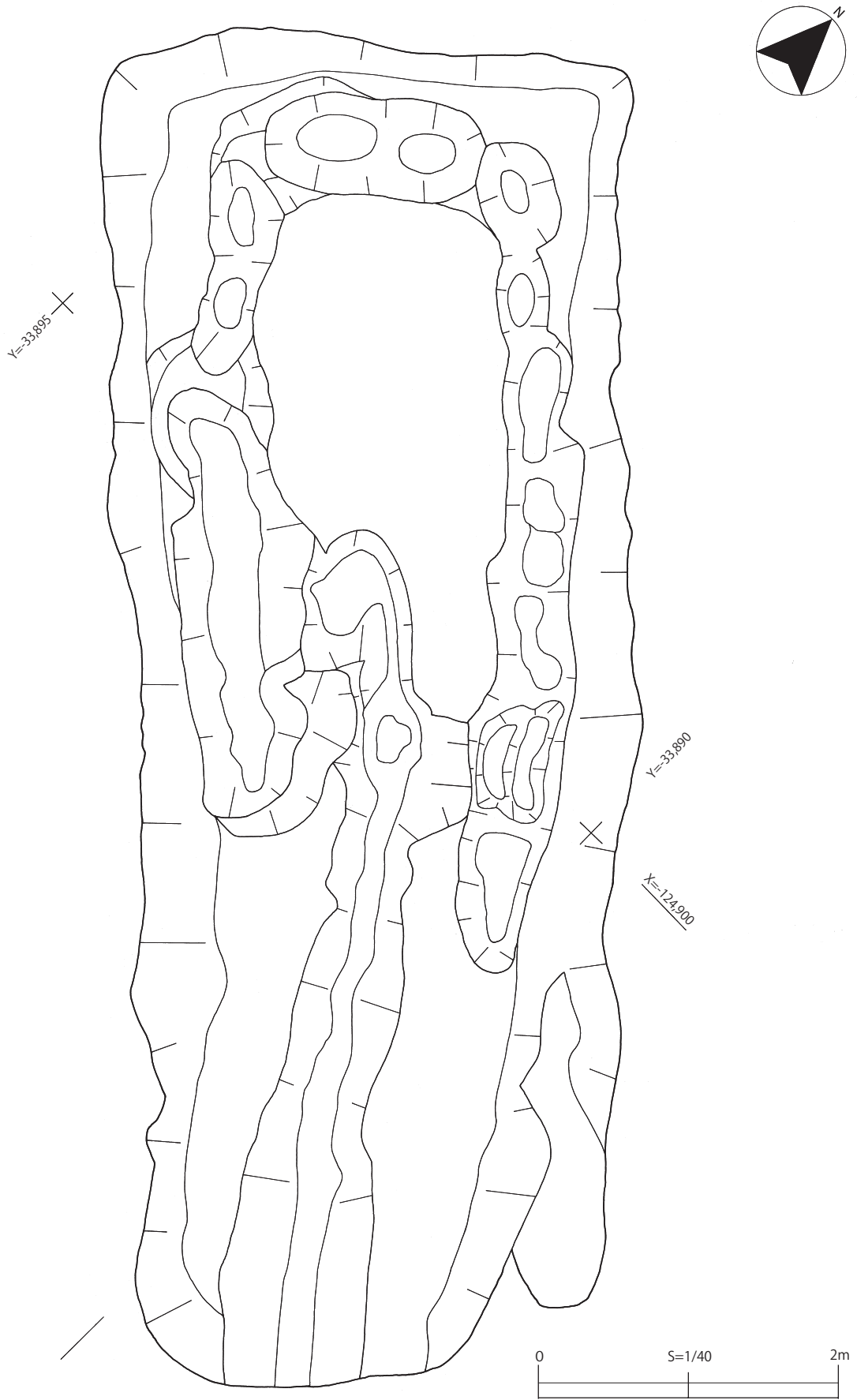


图 15 石室掘方平面图

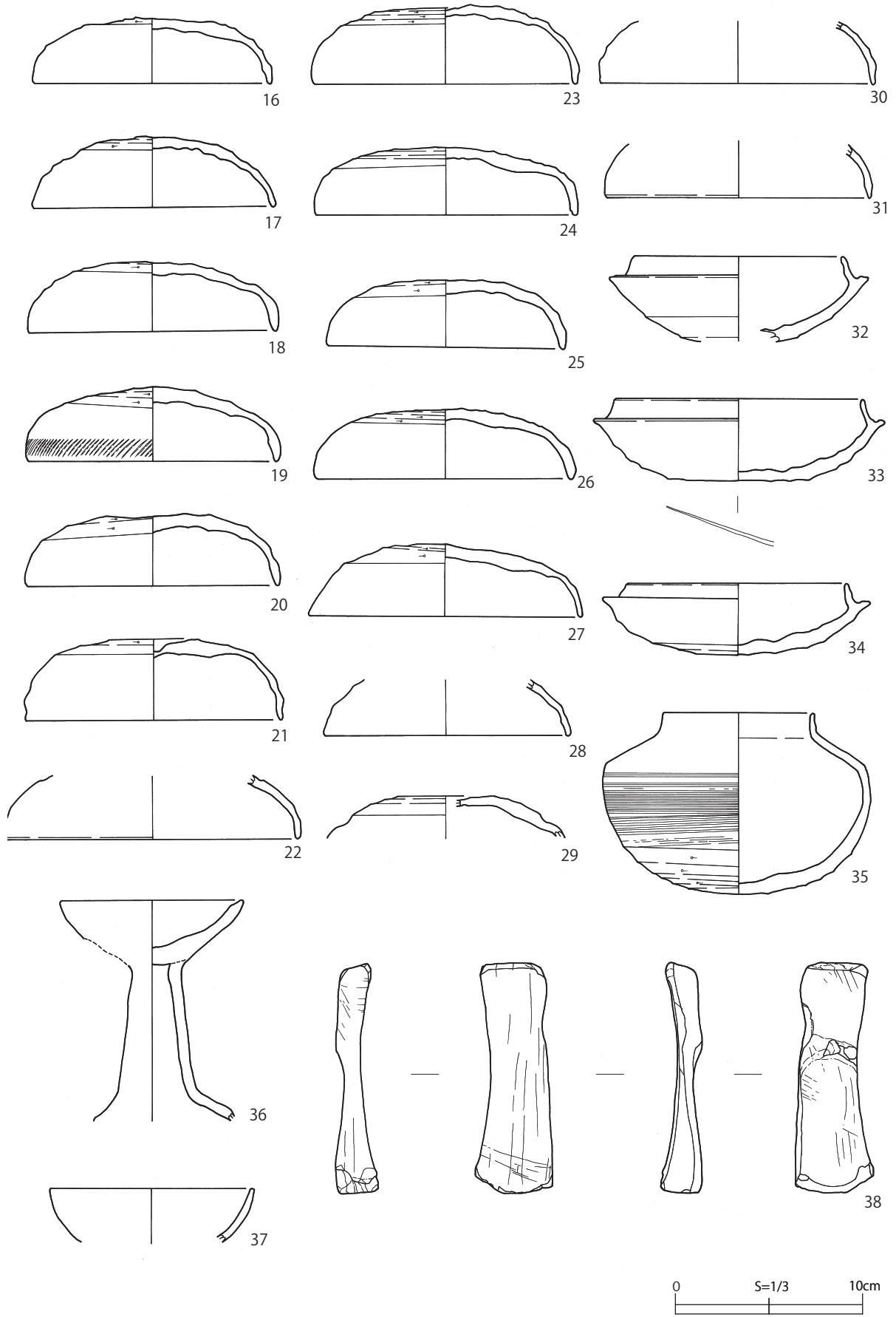


图 16 石室出土遺物実測図 (1)

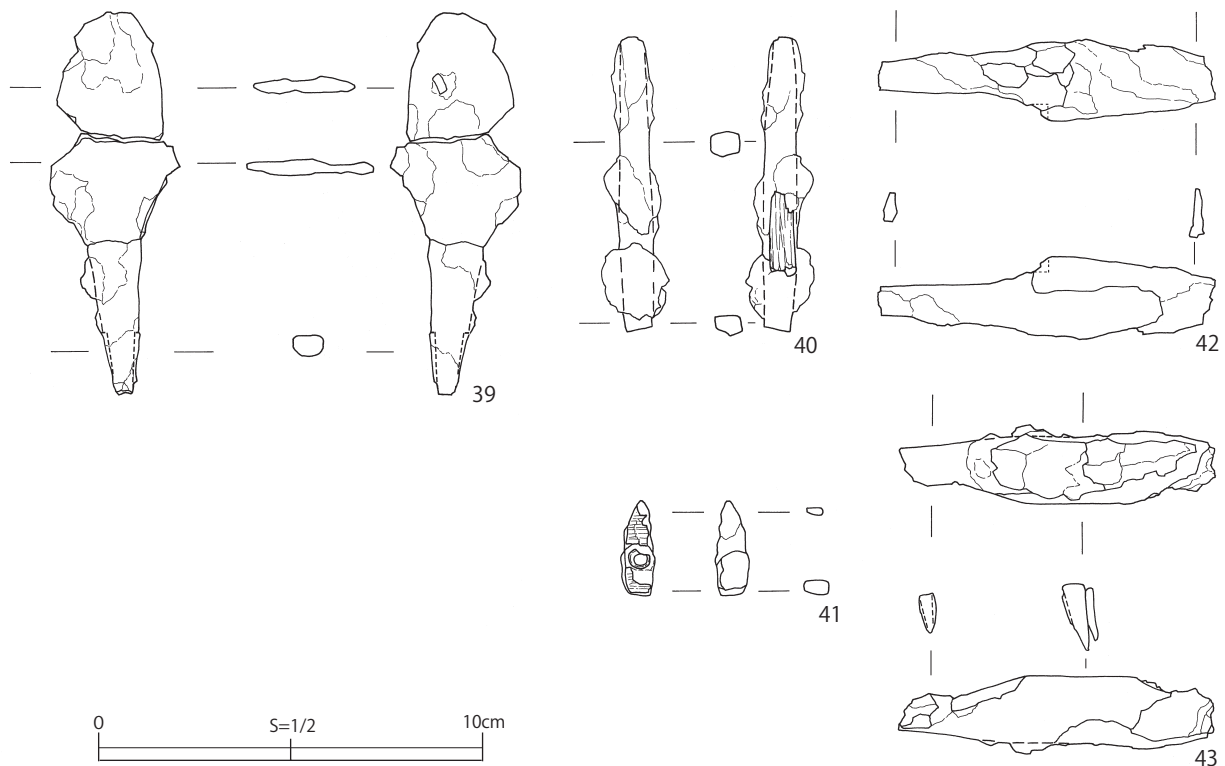


図 17 石室出土遺物実測図（2）

している。このほか、これらの遺物の近くから砥石（図 16 - 38）が出土した。このほかにも、約 9 個体の須恵器が埋葬施設検出中に細片となって出土しているほか、埋葬施設南側の斜面において墳丘検出の段階に出土しており、これらについても本来は埋葬施設内に置かれていた可能性もあろう。

床面から出土した須恵器等については、先述の小壺を含めて、いずれもほぼ礫敷きに直接張り付いたような状況で出土している。このように考えると、完形の須恵器等については埋葬当時の原位置を保っている可能性が高い。一方、鉄製品については石敷きの上に間に埋土をはさんで検出されている。

◆出土遺物 図 16・17 図版 10～13

埋葬施設内からは、床面、埋土中などから須恵器・土師器・瓦器、鉄製品などが出土している。須恵器は、一部の破片が埋葬施設埋土中より出土し、これと床面出土のものが接合したが、大部分は床面から出土している。以下、各遺物の概要を記す。

図 16 - 16～31 は蓋坯の蓋である。いずれも口径 13～15 cm 前後のもので、器高が 3.6～4.3 cm 程度である。口縁部と天井部間には稜がみられず、端部も丸く仕上げられている。形態的には、口径も大きく器高も比較的高いことを考えると TK43 型式に帰属すると考えられる。しかし、蓋坯は側面の立ち上がりが比較的ゆるく、器高も低い傾向が強いことからやや新しい様相を示す可能性もあろう。32～34 の坯身は、口径は 11.5～13.4 cm 前後、器高は 3.9～4.5 cm 程度である。比較的深い坯部を持ち、立ち上がりが短く内傾する口縁部で、端部は丸く仕上げられている。基本的に坯蓋同様に TK43 型式に対応すると考えられる。坯蓋のうち 19 については口縁部外面に櫛描状の斜線を施し、その後口縁端部にナデ調整を施している。同様な例は、大阪府内では吹田市桜井谷古窯址群や日置荘遺跡などでも確認されている。これまでには、製作技術上の痕跡や、文様のものの可能性も指摘されている。しかし、当該資料は製作技術上ではなく、敢えて文様のな施し方をしているようにみえる。

35 は、玄室床面から出土した無蓋の短頸壺である。口径 8.1 cm、胴部最大径 14.6 cm、器高 8.1 cm の

ものである。頸部は短く直立し、口縁端部は丸く仕上げられている。体部は肩部に張がみられ、底部は丸く仕上げられている。

36は、羨道部分の床面から出土した土師器の高坏である。0.35m程度離れて坏部と脚部が出土している。現存で口径9.9cm、器高12.0cmのものである。坏部は小さく体部は僅かに内湾し、口縁部付近で直立気味に立ち上がる。脚は、直立気味に長く伸びた脚部に裾部が急角度に開く。本来造りの粗いものと考えられるが、現状では器壁は脆くかなり状態は悪い。37は、検出段階では椀状の形状をした土師器である。非常に脆く、取り上げ段階で崩壊したため、部分的に遺存している。現存で口径11.0cm器高2.9cmを測る。椀状のものであろうか。

このほか、埋葬施設床面から出土した鉄製品が5点ある。図17-39は鉄鏃である。圭頭鏃群の系譜を引く三角鏃である。最大長10.1cm、最大幅3.4cmを測る。40は現状では不明ながら長頸鏃の軸部ではないかと考えられる。現存で長7.8cm、幅0.9cm、厚さ0.65cmを計る。断面長方形のものであるが、幅広の側面の一方に木質部が2cm程度にわたって遺存している。当初は、釘ではないかと考えたが、他に釘が1点も出土していないことを考えると、長頸鏃の茎部の一部である可能性が高いのではないかと考えられる。41は、不明鉄製品である。現存で、長さ2.5cm、幅0.7cm、厚さ0.4cmを計る。側面の両側に木質が軸に平行に付着している。刃部に僅かに反りがみられることが本来のものであれば、ヤリガンナ先端部の可能性も考えられる。また、当初は片刃の長頸鏃の刃部とも考えたが、木質が刃部近くまで付着していることを考えるとその可能性は低い。42は刃部先端および茎尻部分を欠損した刀子である。現存で長さ8.95cm、幅2.1cm、厚さ0.45cmである。現存で刀身長4.25cm、茎4.7cmを計り、X線撮影により一方にのみ関が確認できた。断面の状況とあわせて判断すると棟関ではないかと判断される。ただし、もう一方の刃部と考えられる部分についても茎部より大きく膨らんでいることから、本来は関があった可能性が高い。この場合は両関式のものとなる。43は、先端部を欠損した刀子である。明瞭な関部が確認できなかった。現存で長さ8.35cm、幅2.0cm、厚さは刃部で0.635cm、茎部で0.435cmを計る。関は片側が直線的につながる様相を示しており片関式と考えられるが、詳細は不明である。

このほか、羨道部から出土した38は砥石である。最大長12.5cm、最大幅4.25cm、最大厚2.25cmのものである。断面は扁平な長方形を呈しているが、かなり湾曲して磨り減っており、長軸各面は砥石としての研磨の為に表面がかなり平滑になっている。材質は、片岩と考えられ緻密な石材である。

◆まとめ

古墳については、次章で成果をまとめることとして、ここでは古墳の盗掘などの問題について記しておく。当古墳は直径15m前後の円墳で、右肩袖式の横穴式石室を埋葬施設としている。埋葬施設は、大部分の石材が抜き取られていたものの、床面の遺存状況が比較的良好で副葬品等の遺物も原位置を保つものが多かった。このことからこの古墳の破壊が古墳の盗掘を目的としたものではなく、石材の抜き取りや上部の削平などの造成を目的としたものと考えられる。

埋葬施設は、多くの石材が抜き取られ、現状で深さ1m弱しか遺存していないことから、かなり大規模な破壊が行われている。盗掘坑埋土内の出土遺物から考えて、中世段階以降に盗掘されたと考えられるが、時期的な限定は難しい。しかし、前節の墳丘上部における包含層など遺物には近世以降の遺物が含まれていることや、上面で何らかの構造物を建造したようなしっかりとした遺構がみつかっていないことなどを考えると、近世以降に農林業的な部分で破壊が行われたと考えられる。さらに言えば、近代以降の緊急時にこうした部分に何らかの一時的な開発が行われた可能性もあろう。

(3) 2～6 調査区の調査成果

第2～6調査区は、1調査区の丘陵尾根の南東側に位置する尾根に設定された調査区である(図18)。地形的には北摂山地から南に突き出た安満山に連なる丘陵から南西部に派生した尾根に位置している。2・3・4調査区は、尾根筋の鞍部の斜面から平坦な部分にかけて、5・6調査区が一段上がった緩斜面にそれぞれ位置している。

当初、2調査区のトレンチを設定して調査を進めた。後述するように、2調査区からは遺構は検出されなかったが、埴輪片・須恵器片が出土したため、他のトレンチを設定した。また、3調査区については、後述する石組み遺構が調査前の段階で確認できたため、これを拡張する形で調査を行った。

3～6調査区については、まず、立ち木等の伐採の後、バックホーを使用して表土・腐植土層上部をめくり、その後人力にて掘削・精査を行った。以下、各調査区の調査について説明を行う。

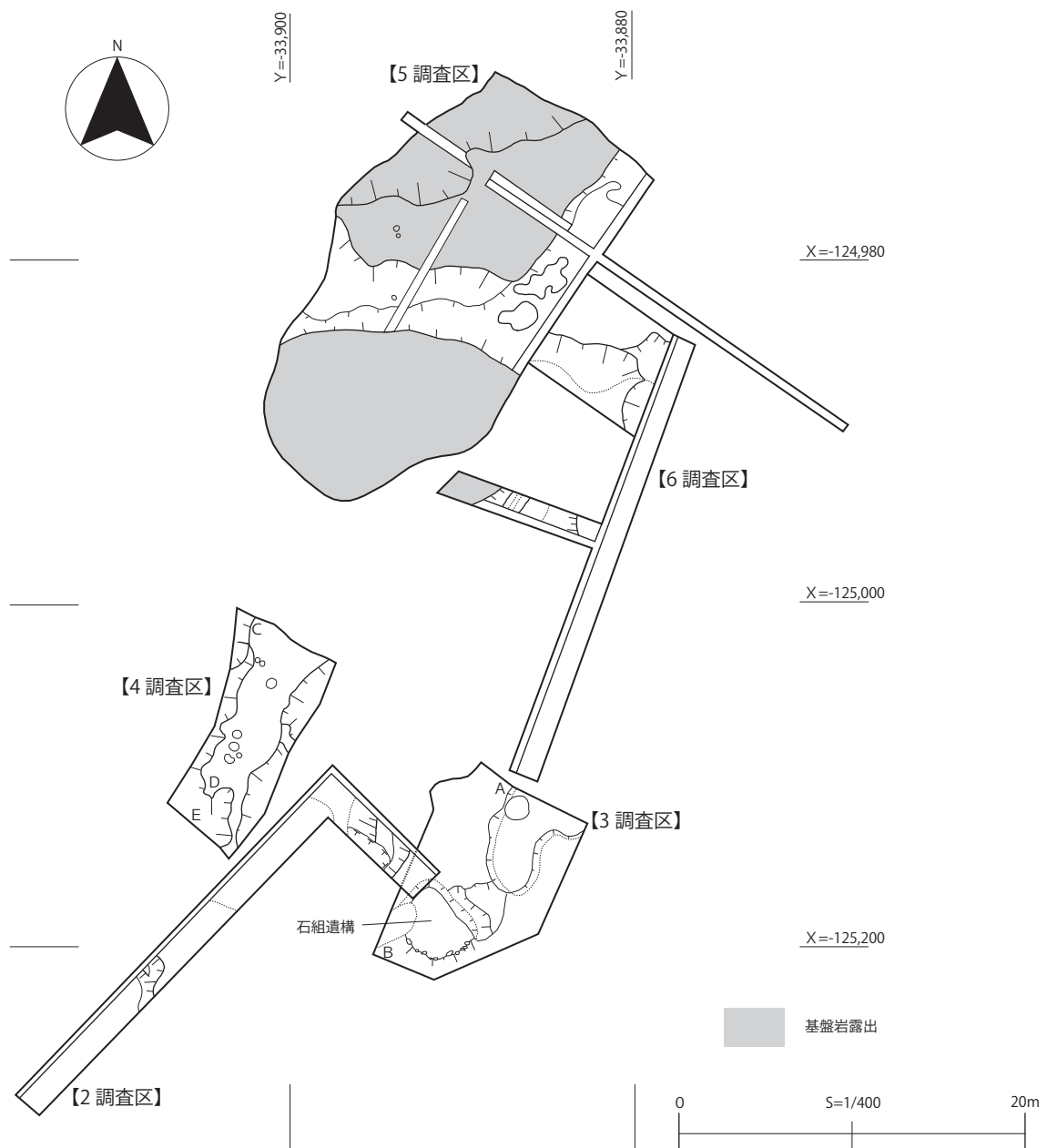


図18 2～6 調査区 平面図

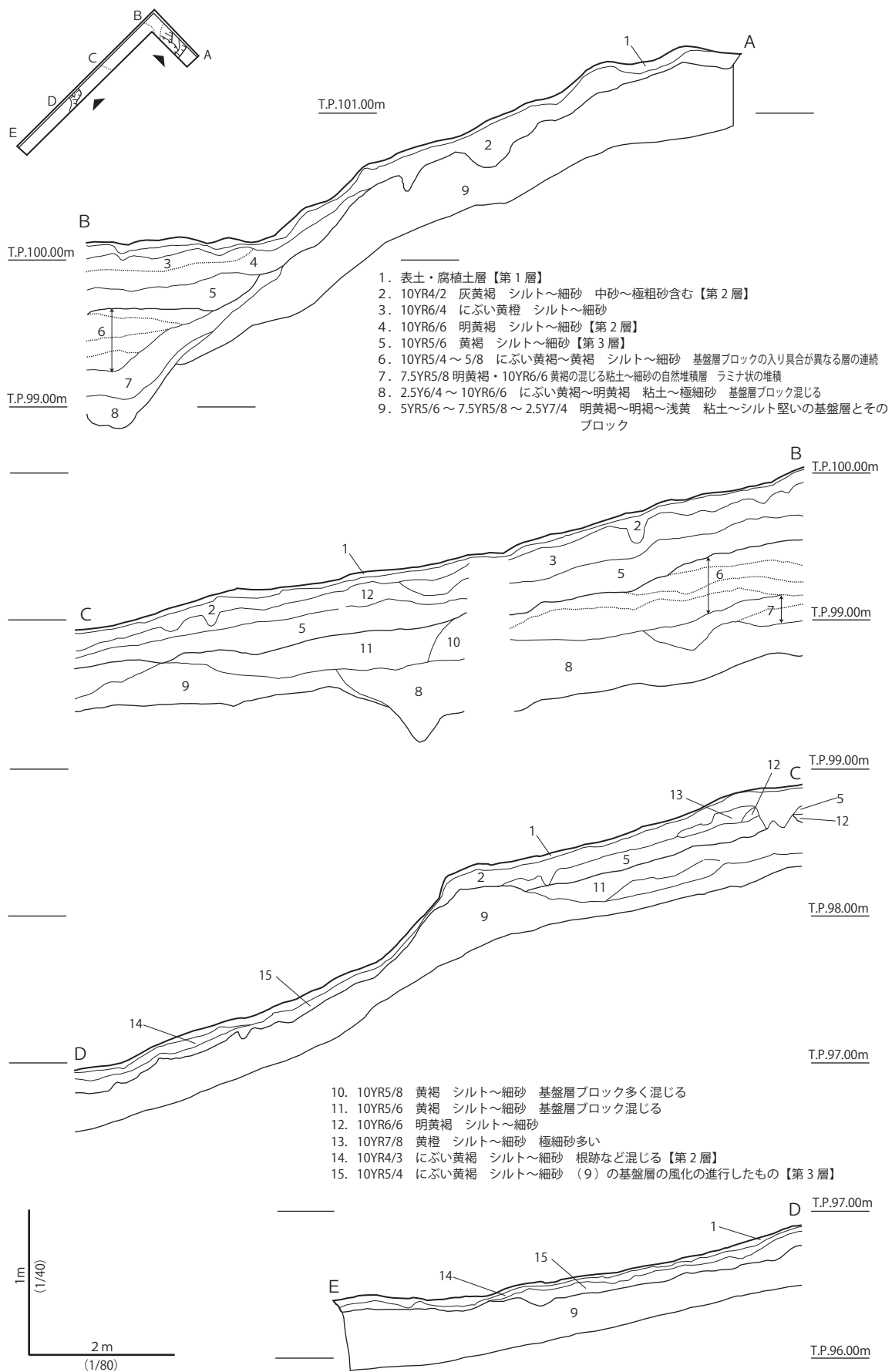


図 19 2 調査区 土層断面図

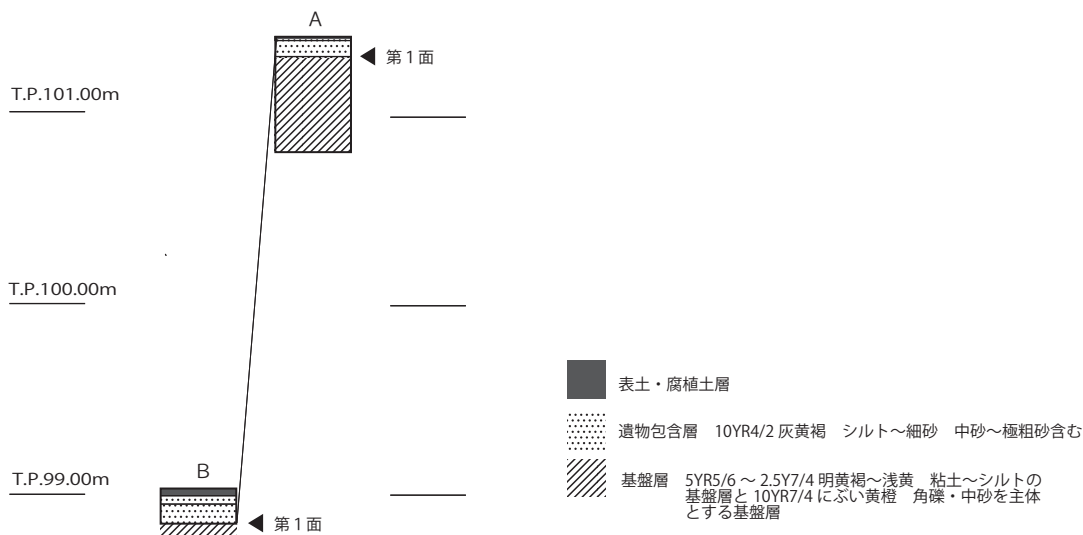


図 20 3 調査区 土層柱状図

◆ 2 調査区 (図 18、図版 5 - 13)

調査地は、北西から下る尾根が大きく落ち込みやや緩やかな斜面を形成している鞍部に設定されている。付近には麓の成合東の町域から当該の丘陵に登るための里道が平行するように取り付いている。また、里道に接して社などが造られており、付近が古くから山道に面していた可能性が高い。

トレンチは、北西端部から南東に直角に延ばした L 字形である。調査は、表土・腐植土層 (第 1 層) を除去し、第 1 面を検出したが人為的な遺構は確認されていない。土層観察の為にトレンチを掘削し下層の確認を行った。トレンチ北東部の L 字に延ばした部分や、南東部の途中で大きく一段低くなった部分では基盤層が露出した状態であった。土層観察の結果、この両側に挟まれた部分は、基盤層が大きく落ち込み、流れ込みによる堆積が厚く積もっていることが明らかとなった。トレンチ掘削の過程で、第 2～3 層 (図 19 - 2・3) から遺物が出土したため、相当層 (図 19 - 2・3・14・15) を除去した。しかし、この面からも遺構は確認されなかった。第 1～2 層ならびに深掘トレンチ上部 (第 3 層中) において、6 世紀の須恵器・埴輪片 (図 25 - 1・2・9・11・13・17) が確認されている。

◆ 3 調査区 (図 18・21、図版 6 - 14・15)

調査区は、2 調査区トレンチの北東端部の南側に位置する平坦面の縁部分で確認された石材が L 字状に並んだ石組遺構とその北東側のなだらかな緩斜面部分である。調査は、表土・腐植土層を除去し、基本的には斜面堆積によって形成されたと考えられる基盤層が検出した。この土層については、後述する第 6 調査区の土層観察用トレンチの南西部分で同様な土壌が確認されている。

石組遺構 (図 21) は山側の明黄褐～浅黄 (5YR5/6 ~ 2.5Y7/4) の粘土～シルトの基盤層を掘り込み平坦面を造り出し、谷側にその掘削した土壌を盛土を施して平坦面を拡張し、その縁辺部に石を並べて構築している。平坦面および石組周辺部から遺物は出土していない。このほか地形的にやや高い石組北側の斜面から、須恵器片・埴輪片 (図 25 - 3・6・8・21) のほか近代以降の陶磁器がみついている。出土遺物もないため、石組み遺構の時期を明らかにできない。

◆ 4 調査区 (図 18・22、図版 6 - 16・18)

調査地は、2 調査区の西側に南北に細長い尾根上地形の下部の緩斜面に位置している。表土および腐植土層を除去して基盤層の明黄褐～浅黄 (5YR5/6 ~ 2.5Y7/4) の粘土～シルトの土層が全面的に検出された。東西両端部と南西の地形的に低い部分において地形的な落ち込みが確認された。基盤層上面か

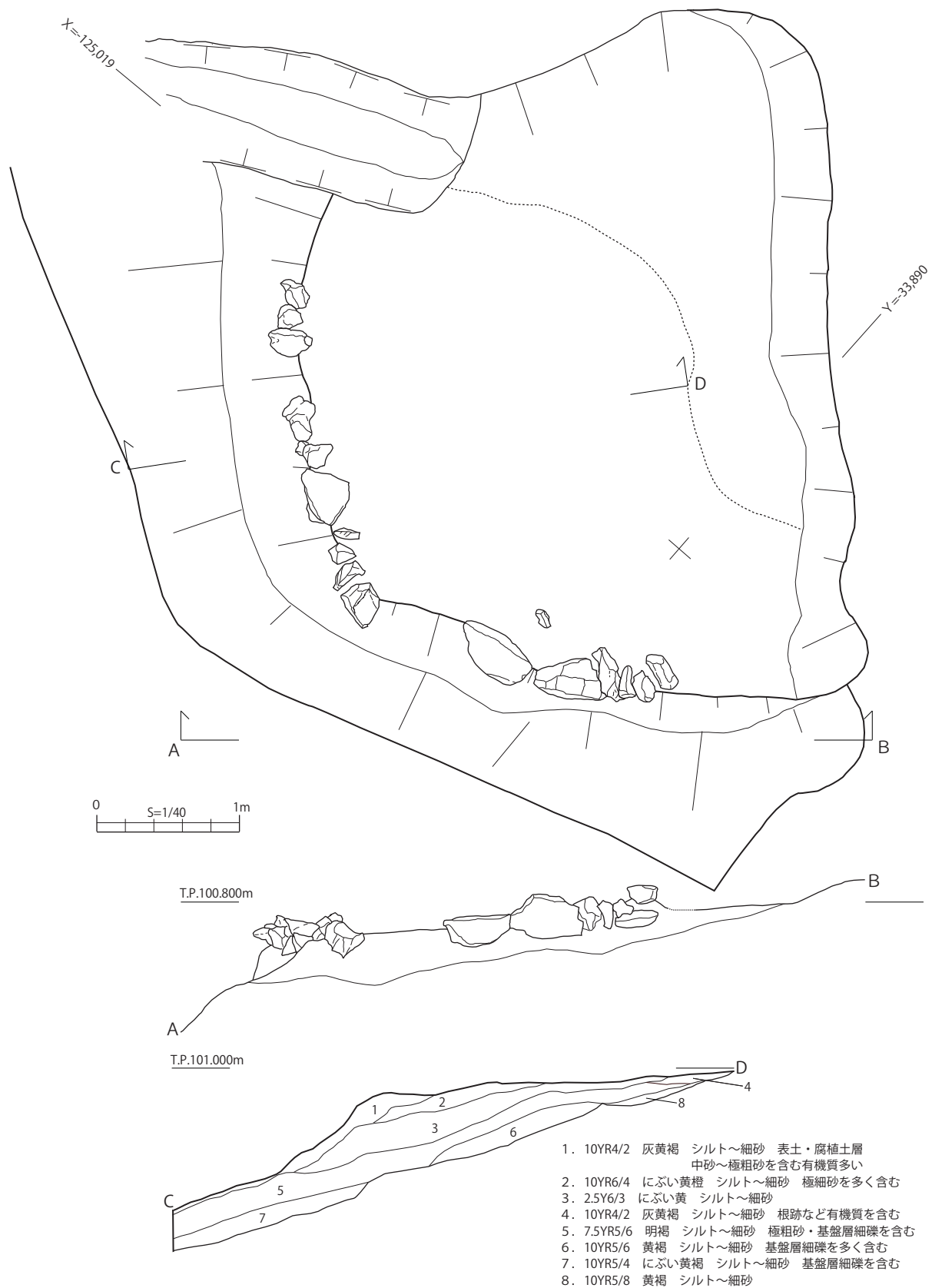


図 21 3 調査区 石組み遺構平・断面図

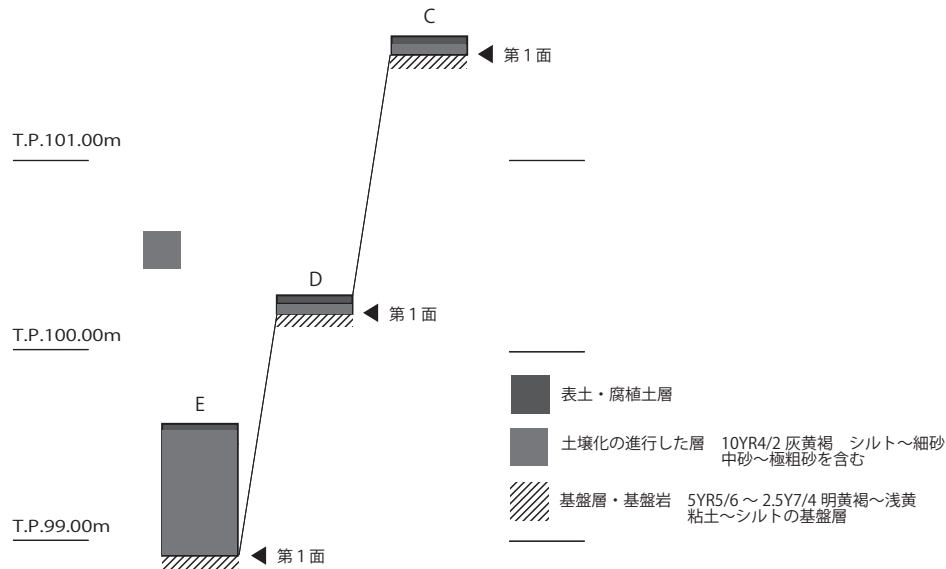


図 22 4 調査区 土層柱状図

らはピット状の焼土面を7基検出した。これらは、窪みも掘られておらず、火を焚いた痕跡と考えられ、焼け焦げによる変色と炭化物がみられるものである。この調査区からは、遺物は出土していない。

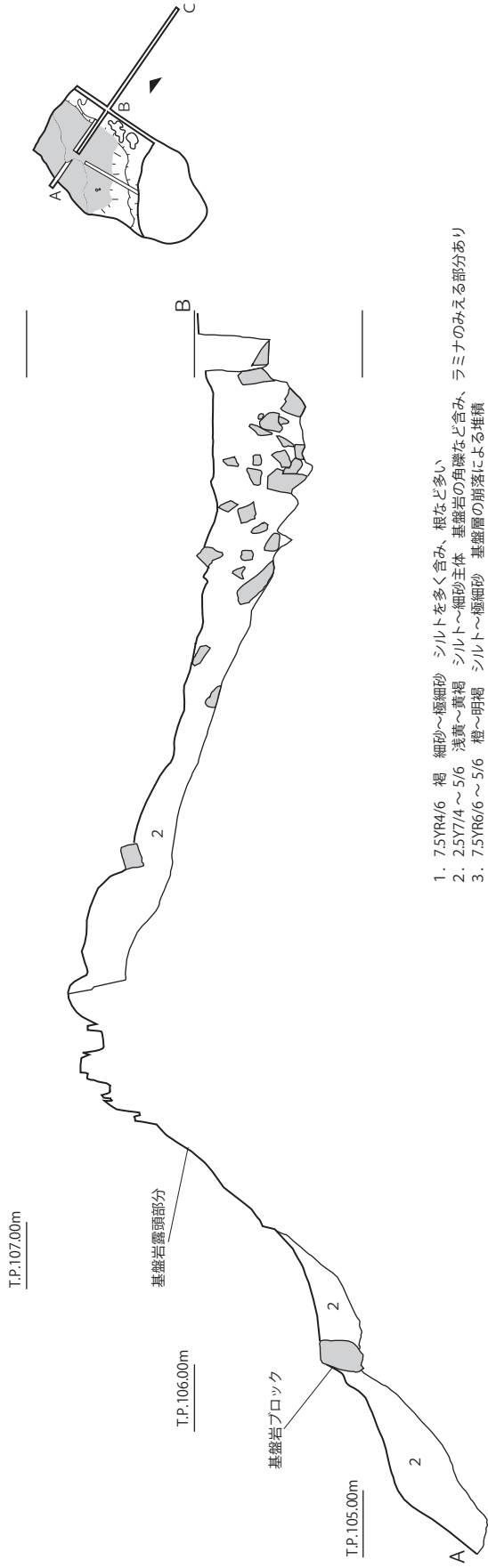
◆ 5 調査区 (図 18・23、図版 7 - 19・20)

調査地は、調査範囲最上部の尾根上の平坦部分とその北側に位置する小さな高まり部分である。形は不定形ながら、古墳墳丘の可能性があると考えられたことから、全面的に表土を除去して調査を行った。しかし、調査の結果、この高まり部分は岩脈状の基盤層とそれらの石材の崩落したものを主体として形成されていることが明らかとなった。また、南側の平坦面は南西から北東に延びる筋状の脈みられるモロモロの粘土・シルト質の岩脈状の基盤層で構成されている。この2つの基盤岩の間には、僅かに落ち込み状のくぼんだ部分の確認されたが、土壌を除去したところ、南側にみられた粘土・シルト質の基盤岩がみられる部分や拳大の礫を含む層が確認された。

遺構は、北側の高まり部分から南西に下がっていく斜面において、炭化物を含む3基のピット状の変色のみみられる浅いものである。このほか、バックフォーによる表土の除去作業中に5調査区北東側の平坦面から埴輪片が出土した。このため5調査区と6調査区の間の平坦面とそこから続く緩斜面についても5調査区拡張部として表土・腐植土層の除去作業を行った。しかし、ここからも人為的な遺構等は確認されなかった。5調査区および拡張部からは、埴輪片および須恵器片(図 25 - 47・48・57・58・59・61)、これに加えて近世後半以降の陶磁器等が若干出土している。

◆ 6 調査区 (図 24、写真 21・22)

調査地の東側の南北に里道が通っていた傾斜の緩やかな部分にT字状に設定した調査区である。調査では、表土および腐植土層を除去したところ、若干の土壌がみられ、その下部には基盤層の砂礫層が層状堆積した状況がみられた。調査では、表土・腐植土層の下部にくすんだ堆積層がみられたが、その直下にラミナ状の堆積層が確認された。また、この6調査区と5調査区の間には、2調査区に向かって徐々に深くなる谷状の地形が入り込んでいる。調査では、この部分の構造を考えるために、6調査区から5調査区の南側の基盤岩の露出した部分に向かってトレンチを設定・掘削して断面の観察を行った。この部分は、やや厚めに表土・腐植土層が堆積していたものの、基本的には6調査区の断面同様の砂質の自然堆積層の堆積する状況であった。この調査区では、遺構や遺物などは確認されていない。



1. 7.5YR4/6 褐 細砂〜極細砂 シルトを多く含み、根など多い
2. 2.5Y7/4〜5/6 淺黄〜黄褐 シルト〜細砂主体 基盤岩の角礫など含み、ラミナのみみえる部分あり
3. 7.5YR6/6〜5/6 橙〜明褐 シルト〜極細砂 基盤層の崩落による堆積
4. 5YR6/6〜5/6 橙〜明赤褐 シルト〜極粗砂 基盤層の崩落による堆積
5. 5YR5/3〜5/6 にぶい赤褐〜明黄褐 粘土〜シルト〜極粗砂のラミナ状の堆積
6. 7.5YR6/8 橙 シルト〜極粗砂 基盤層

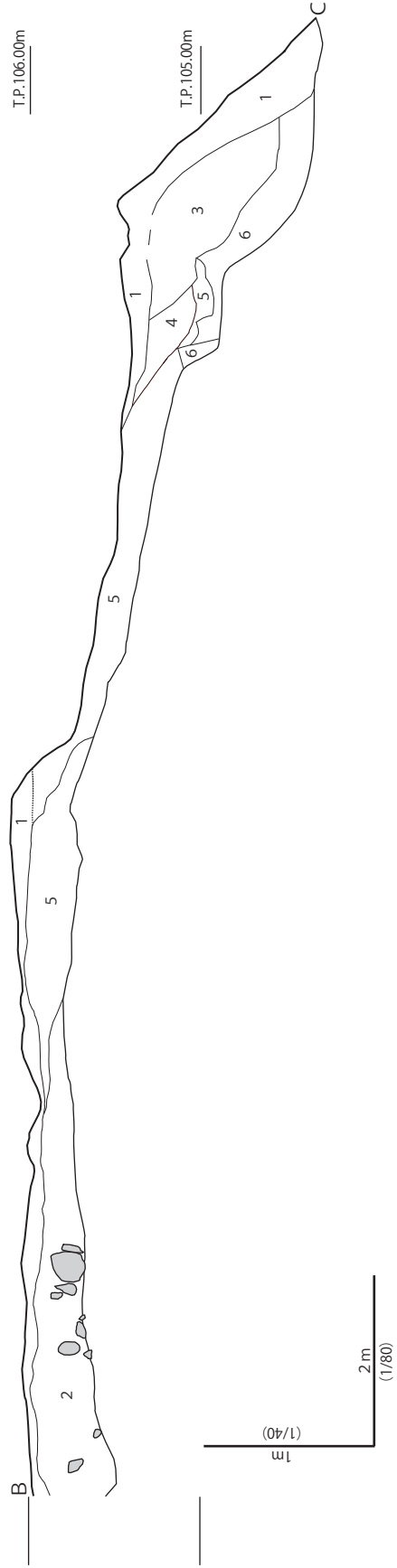


図 23 5 調査区 土層断面図

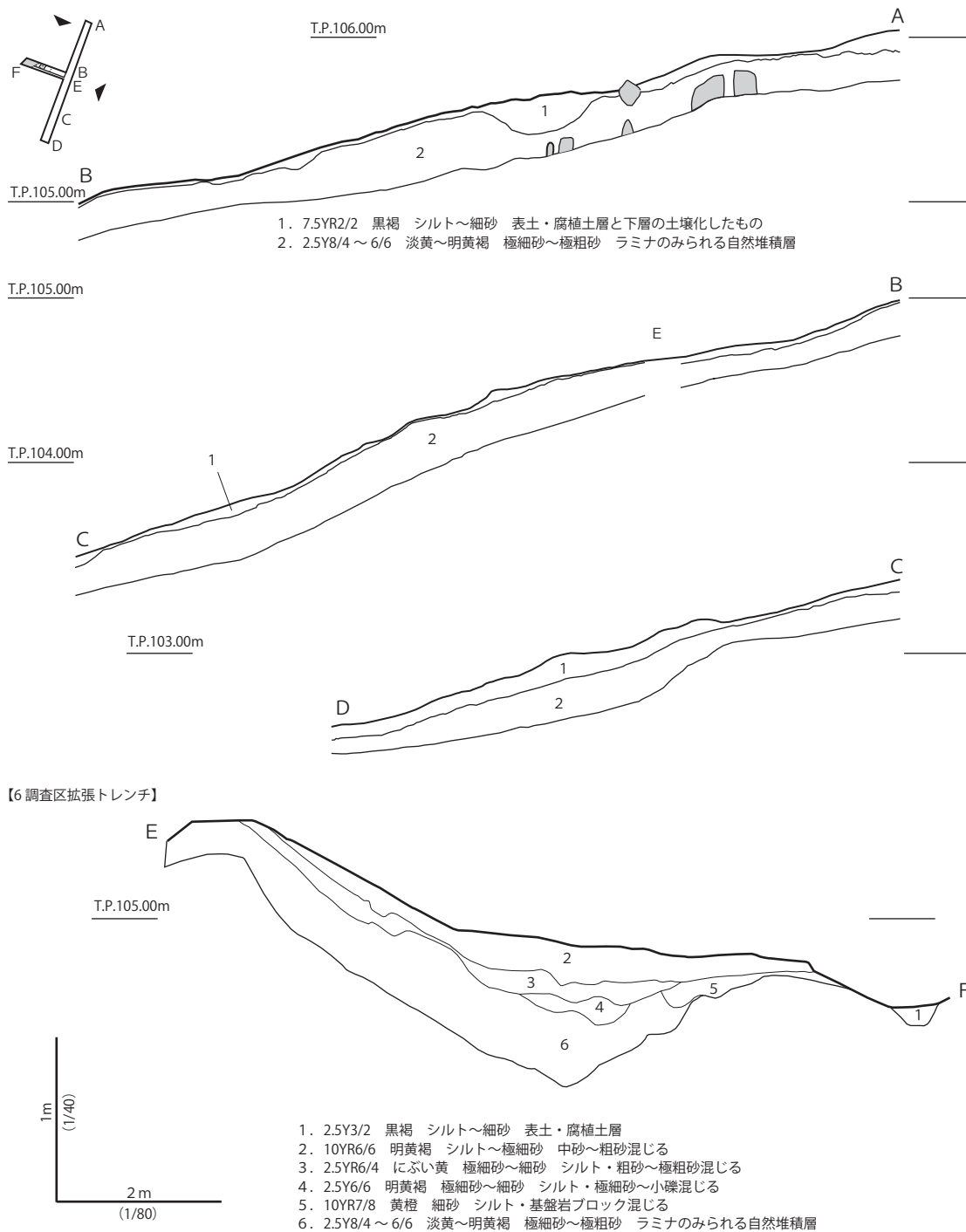


図 24 6調査区 土層断面図

◆ 2～6調査区出土遺物 図 25 (遺物番号の後ろの () 内の数字は出土調査区を示している。)

いずれも 44・45 (以上 2 調査区) は須恵器蓋坯の坏蓋である。45 は、口径 11.6 cm 程度のもので、肩部に凹線條の段を持ち、口縁端部は内面に明瞭な段を持つ。46 (3 調査区)・47 (5 調査区)・48 (5 調査区) は、須恵器蓋坯の坏身である。およそ TK10～MT85 型式段階前後のものであろうか。49 (3 調査区) は、甕の口頸基部である。外面に波状文を施している。TK47 型式段階前後のものであろう。50 (6 調査区) は有蓋高坯の脚部である。細片の為全容を明らかにできないが、3 方向に長方形のスカシ孔が作られている。51 (3 調査区) は、須恵器の小型の甕口縁部である。屈曲する口縁部を持ち、口頸部外面には荒い波状文を施している。TK47 型式前後のものであろう。

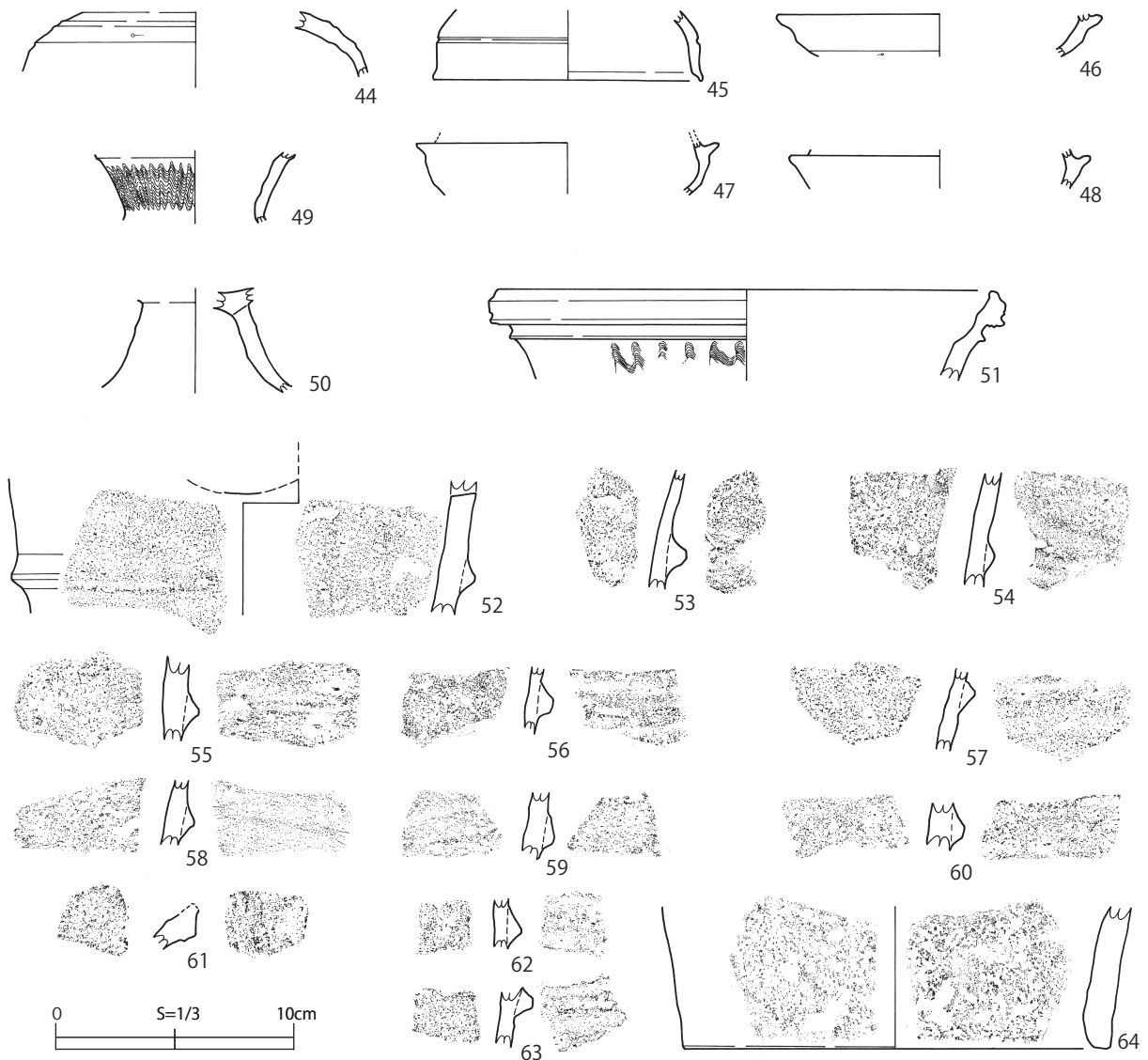


図 25 2～6 調査区 出土遺物実測図

52・54・56・60 (以上 2 調査区)、64 (3 調査区)、57・59・61・63 (5 調査区)、53・55・58・62 (以上 6 調査区) は、埴輪片である。このうち 61 以外は円筒埴輪の破片である。今回報告にあたっては、突帯の残る破片を中心に掲載した。いずれも、断面三角形の退化した突帯を持つもので古墳時代後期のものと考えられる。61 は、唯一朝顔形円筒埴輪と考えられる破片である。いずれも摩滅が激しく内外面ともハケによる調整等は確認できなかった。2～6 調査区からはこれらの遺物とともに若干の近世・近代の遺物が出土しているのみである。

◆まとめ

今回の調査では、時期の明確な遺構を確認することはできなかった。唯一確認された 3 調査区の石組遺構も関連する遺物が出土せず、時期を特定するにはいたっていない。こうしたなかで注目されるのは、包含層資料ながら 5 世紀末から 6 世紀代の須恵器・埴輪が出土していることである。5・6 調査区付近は比較的広くなだらかな地形となっており、地形の改変が行われている可能性も高い。結果的に広範囲に調査を行ったにも関わらず古墳は確認されなかったが、今後周辺部分で古墳が確認される可能性もある。今後の調査に期待したい。

第4章 総括

今回の調査では、第1～6調査区の6つのトレンチの調査を行った。このうち、1調査区では、成合1号墳と命名された横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳が確認された。最後にこの古墳を中心に調査成果をまとめておきたい。そのほかの調査については、各節のまとめを参照されたい。

[墳丘]

墳丘は、現状から判断して直径15m前後の円墳と考えられる。墳丘の造成にあたっては、丘陵方向の北東部と南西部の尾根筋を削平して墳丘盛土を施したものと考えられる。なかでも北側については若干であるが周溝状の窪みを掘削している。この部分については、その後の墳丘削平段階などに何らかの改変が加わっている可能性もあるが、表土層などを除去した段階に墳丘部分が大きく突出した状況から、この部分の削平土を墳丘盛土とした可能性を考えることができる。

[埋葬施設]

埋葬施設は、南東に開口する横穴式石室で、墓壙の掘方は長軸が最大9.1m、短軸が最大1.7mを測る。墳丘上部は少なくとも1m以上の削平を受けており、本来の掘込み面においてはさらに大きくなる可能性もある。内部主体は、右肩袖式の横穴式石室で羨道部分と玄室左側壁2石だけが遺存した状況であった。このほかの石室構築石材については、中世以降の時期の盗掘により抜き取られている。規模は、全長6.4m・玄室長3.4m・玄室幅1.4m程度と考えられる。石材は、石室壁面において横幅0.9m程度、高さ0.7mのものがみられ、羨道部では横幅0.4～0.7m程度、高さ0.3～0.4m程度の石材で構成されている。

横穴式石室は、1段目の一部しか石材が遺存していない。しかし、羨道部では横に長い石材の平積みが推定袖石に近くなるにしたがい大型化することや横長石材の平積みと考えられることから、太田宏明分類の第5群～6群にかけての石室の可能性が高いと考えている。また、石室の特徴を挙げるとすれば、玄室と羨道部の接続部で屈曲してやや弓形の平面形であること、玄室と羨道部間の床面に「梱石」と考えられる玄室側壁1段目寄りやや低い程度の高さを持つ石材が配置されているが挙げられる。このほか、床面のレベルが玄室から羨道部に向かって高くなっていること、墓壙掘方においても同様で、羨道部では石材据付痕跡が確認されなかったことである。

石室規模については、当該地域である北摂地域を例にとれば、6世紀後半代の群集墳の14例ほどの石室例からみて、玄室長で2.5～4.3mで平均が3.72m、玄室幅が1.0～2.5mで平均1.54m程度である（基礎データは、横田2007より）。類例も左右の相違はあるが片袖式が多い。また、7世紀代の第1四半期については、類例が18例あり玄室長2.2～4.5mで平均が3.46m、玄室幅が1～2.3mで平均が1.53mである。このことから考えて、当該の石室はほぼ中規模程度の石室と考えられる。

[副葬品]

出土した須恵器は、器種に偏りがみられるものの、詳細にみると個体によりTK43型式段階のなかでも後出する要素を多く持つものがある。これについては、玄室内の出土遺物のうち左側壁際に3点重ねられた須恵器坏蓋は2点がTK43型式に相当し、一番上に重ねられた1点がTK209型式に近い資料と考えられる。ただし、いずれも両段階の中間的様相を示している。短頸壺については、TK43型式と考えて問題はない資料である。このほか、羨道部の須恵器坏蓋2点はTK209型式に近いものである。このように、個々の様相を取り上げれば2つの型式の様相がみられるが、現実的には1つの埋葬に伴

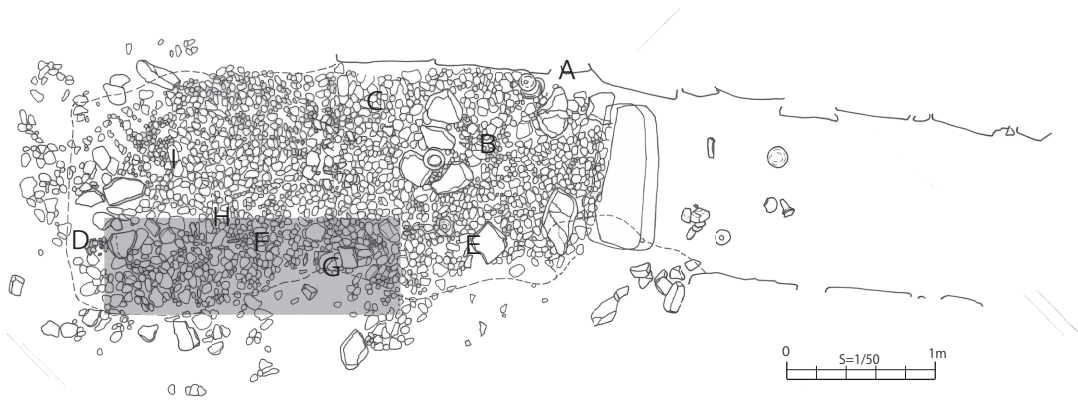


図 26 埋葬施設内における遺物出土状況からみた木棺推定位置の復元

うものと考えて良いものと考えられる。

鉄製品については、鉄鏃は須恵器から考えられる時期に通有の形式のものと考えられる。

このほかに、石室床面からの出土遺物に砥石がある。砥石は、古墳時代中期以降に古墳からしばしば出土するもので、朝鮮半島の佩砥の習俗の影響を受けたものとして捉えられている。奈良県では 22 基、大阪府では 3 基の古墳からの出土例があり、当古墳の近郊では高槻丘陵の塚原古墳群第 8 号墳からの出土が知られている（鹿野 2006）。これらの資料の傾向としては、実用品としての砥石が副葬されている場合が多く、被葬者から離れた位置に出土する傾向とされている。当古墳においても、出土資料は明らかな実用品である。

〔副葬品配置からみた棺の配置〕

今回検出した横穴式石室においては、奥壁や側壁など石室構築石材はほとんどが抜き取られていたものの、床面については礫敷きの遺存が比較的良好であった。玄室からは、鉄釘もしくは鉄鏃の可能性がある鉄製品が 1 点しているが、本来釘を使用しない木棺が収められていた可能性が高い。最後に、副葬品の配置から棺の配置および追葬の有無について考えておきたい。

埋葬施設内の副葬品の配置をみると、ほとんどの副葬品が玄室中央部～左側壁寄りから出土している。このほか、一部の須恵器については、中央より右側壁寄りにも散乱している。左側壁寄りの一群は、大きく 3 つに分かれている。(A) は左側壁近くの 3 個体が重ねられて出土した坏蓋、もうひとつは (B) 人頭大より少し小さい石に囲まれて配置された短頸壺、そして (C) 4 個体が破片となって出土した一群である。また、右側壁寄りには、(D) 奥壁寄りに 1 個体が割れて出土したもの、(E) 短頸壺の近くで 2 個体の破片がみついている。鉄製品は、刀子 (F・G)・鉄鏃 (H・I) などが散乱した状況で、いずれも礫敷き直上ではなく数センチの土壌を挟んでいた。これについては、この部分の土壌が木棺などの腐食したものである可能性も考えられる。

出土状況から、それぞれの少なくとも須恵器については本来の位置を保っている可能性が高いことを考えると、玄室内に木棺を配置する空間としては、玄室内右側壁寄りが有力である（図 26）。この部分には、主軸に平行して約 2 m ほどの空間が空いている。ただし、鉄製品は刀子 2 点が完全に棺内に位置し、鉄鏃 2 点は棺側付近およびやや離れた位置となる。幅については、右側壁が全て抜き取られこの部分の敷石も乱れていることからどの程度の空間があったものかは明らかではないが、敷石の遺存状況から推定すると 60 cm 程度の空間は確保できたのではないかと考えられる。埋葬施設における追葬については、これらのことから他に棺が配置されていた可能性は低いと考えている。これに関連して、一部左側

壁際に坏蓋3個体が重ねられた状態で出土しているものの、これ以外については棺内の須恵器を整理したような状態ではない。また、出土した須恵器については、先述のようにTK43型式段階のものがみられ、明確な時期差を想定しがたい状況である。もうひとつ羨道部における須恵器・土師器などの土器類と砥石がまとまって出土していることであるが、これについては羨道部の長さから考えて、棺が追葬された可能性は低く、被葬者埋葬後の玄室入口部分で何らかの祭祀的な行為に伴って配置されたものと考えておきたい。

[古墳の立地について]

この古墳は、現段階では周辺には同様な古墳は確認されておらず、単独立地する古墳ということができる。近接する安満山古墳群とは谷を挟んで向かい合う位置にあり、現状では同一の古墳群とするには躊躇される。この地域は、古墳時代後期の首長墓級の独立墳の動向が不明な地域で、群集墳内にみられるような規模の古墳が単独に立地してみられる地域とされる(森本2000)。現状では、南側に位置する安満山古墳群とは金龍寺の位置する谷を挟んで大きく隔たっており、同一古墳群と考えることは難しい。このように考えると、当古墳は先述のような群集墳規模の単独墳の一例ということができる。先述のように、当古墳は規模的には当該時期の群集墳に多くみられる中規模程度の埋葬施設をもつもので、何らかの理由で群集墳を形成し得なかったものとする。

ただし、今回の調査において2～6調査区においても6世紀代と考えられる埴輪や須恵器が出土していることや、第2章でも記述したように近接する成合遺跡の調査においても終末期の横穴式石室が確認されていることを考えると、今後も当該丘陵付近において古墳が確認される可能性もあろう。その意味では、今後周辺部分での調査の進行を見守る必要がある。

【引用・参考文献】

- 高槻市史編さん委員会 1973『高槻市史 第6巻 考古編』高槻市市役所発行
高槻市史編さん委員会 1997『高槻市史 第1巻 本編I』高槻市市役所発行
森本 徹 2000「付章 北摂地域における栗栖山南古墳群の位置づけ」『栗栖山南墳墓群』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第57集
太田宏明 2003「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』第15号
高槻市立しろあと歴史館 2006『発掘された埴輪群と今城塚古墳』
鹿野 塁 2006「古墳出土の砥石」『2004年度 共同研究成果報告』財団法人大阪府文化財センター
森田克行 2006『今城塚と三島古墳群』株式会社 同成社
森本 徹 2007「横穴式石室と葬送儀礼」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
横田真吾 2007「地域別概説 北摂地域の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
渡邊可奈子 2010「畿内における古墳時代の刀子—大和地方を中心に—」『古代学研究』185号 古代学研究会
高槻市立しろあと歴史館 2011『成合 春日神社と金龍寺』(シリーズ高槻の村と町II) 第15回企画展 高槻市立しろあと歴史館
公益財団法人大阪府文化財センター 2012『金龍寺旧境内跡』 公益財団法人大阪府文化財センター発掘調査報告書第224集

写 真 图 版



1. 1 調査区 第1面頂部検出遺構 (北から)



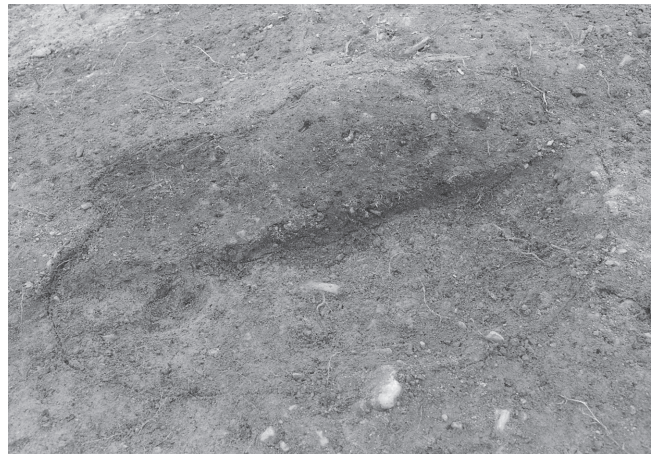
2. 1 調査区 3 トレンチ西側 (南から)



3. 1 調査区 1 トレンチ西側 (南から)



4. 1 調査区 5 土坑 (西から)



5. 1 調査区 6 土坑 (西から)

図版2 遺構



6. 1 調査区 墳丘全景（南西から）



7. 1 調査区 羨道部・玄室を望む（南東から）



8. 1 調査区 床面遺物出土状況 (1) (北東から)

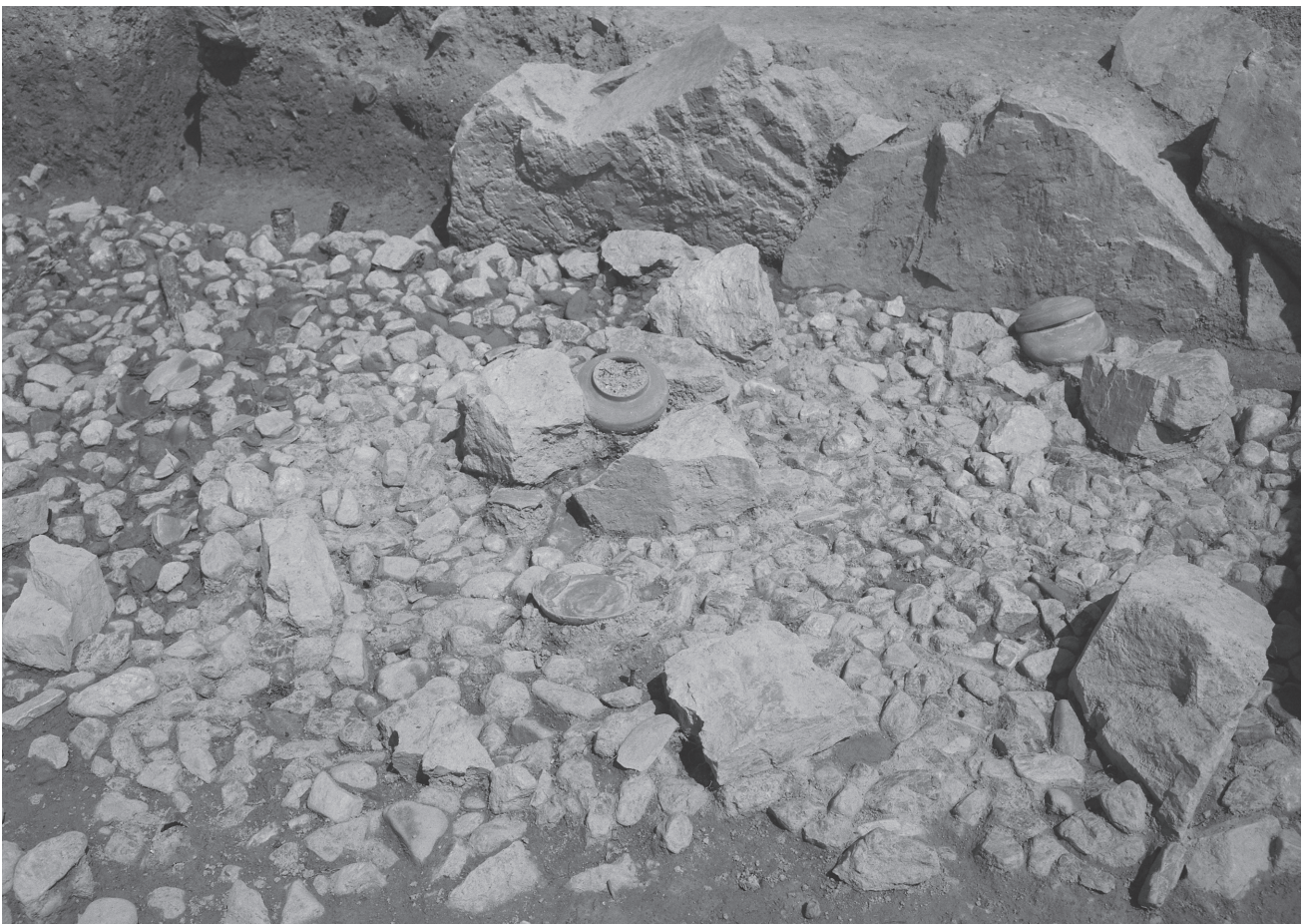


9. 1 調査区 床面遺物出土状況 (2) (南西から)

図版4 遺構



10. 1 調査区 床面遺物出土状況 (3) (西から)



11. 1 調査区 床面遺物集中部の状況 (南西から)



12. 1 調査区 石材据付跡の検出状況（北から）



13. 2 調査区 第2面検出状況（北東から）

図版6 遺構



14. 3調査区 第1面の検出状況（南西から）



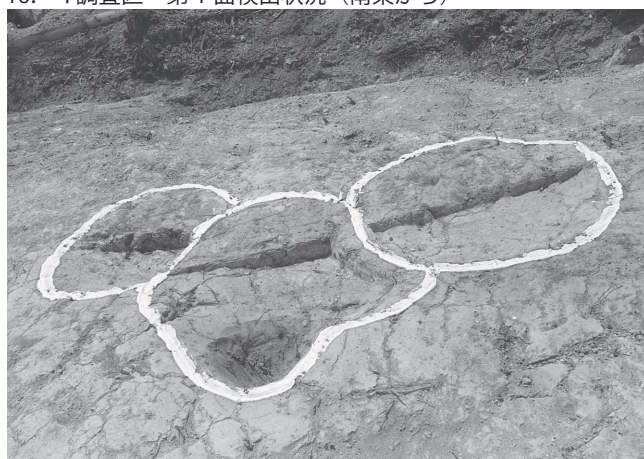
15. 3調査区 石組遺構の加工面検出状況（南から）



16. 4調査区 第1面検出状況（南東から）



17. 3調査区 斜面上部よりの全景（南東から）



18. 4調査区 ピット状遺構（南東から）



19. 5調査区 第1面検出状況（東から）



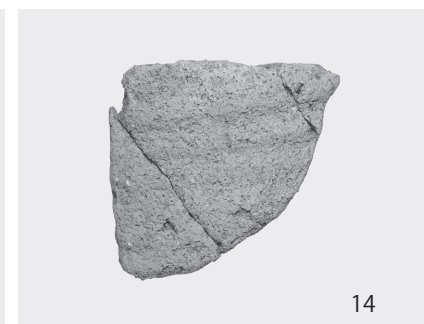
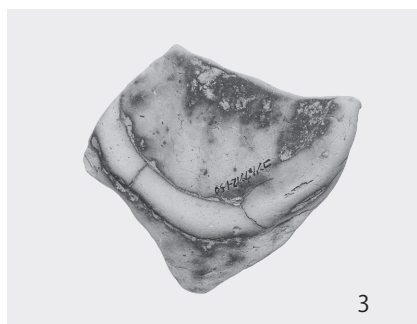
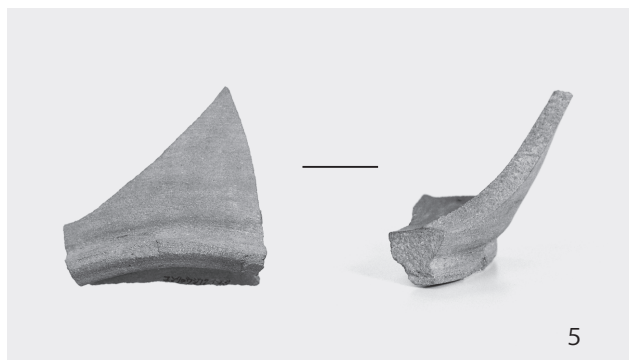
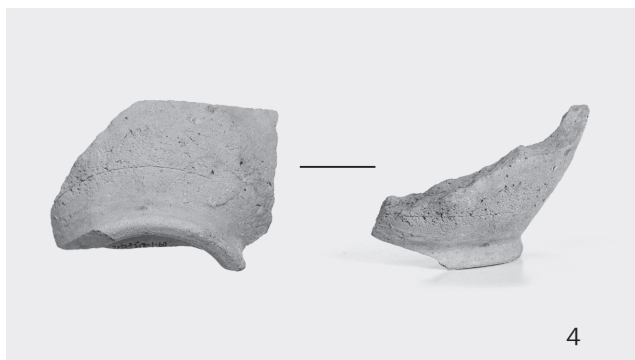
20. 5調査区拡張部 第1面の検出状況（北西から）



21. 6調査区 第1面検出状況（北から）



22. 6調査区 第1面検出状況（北東から）





7



16



17



18



20

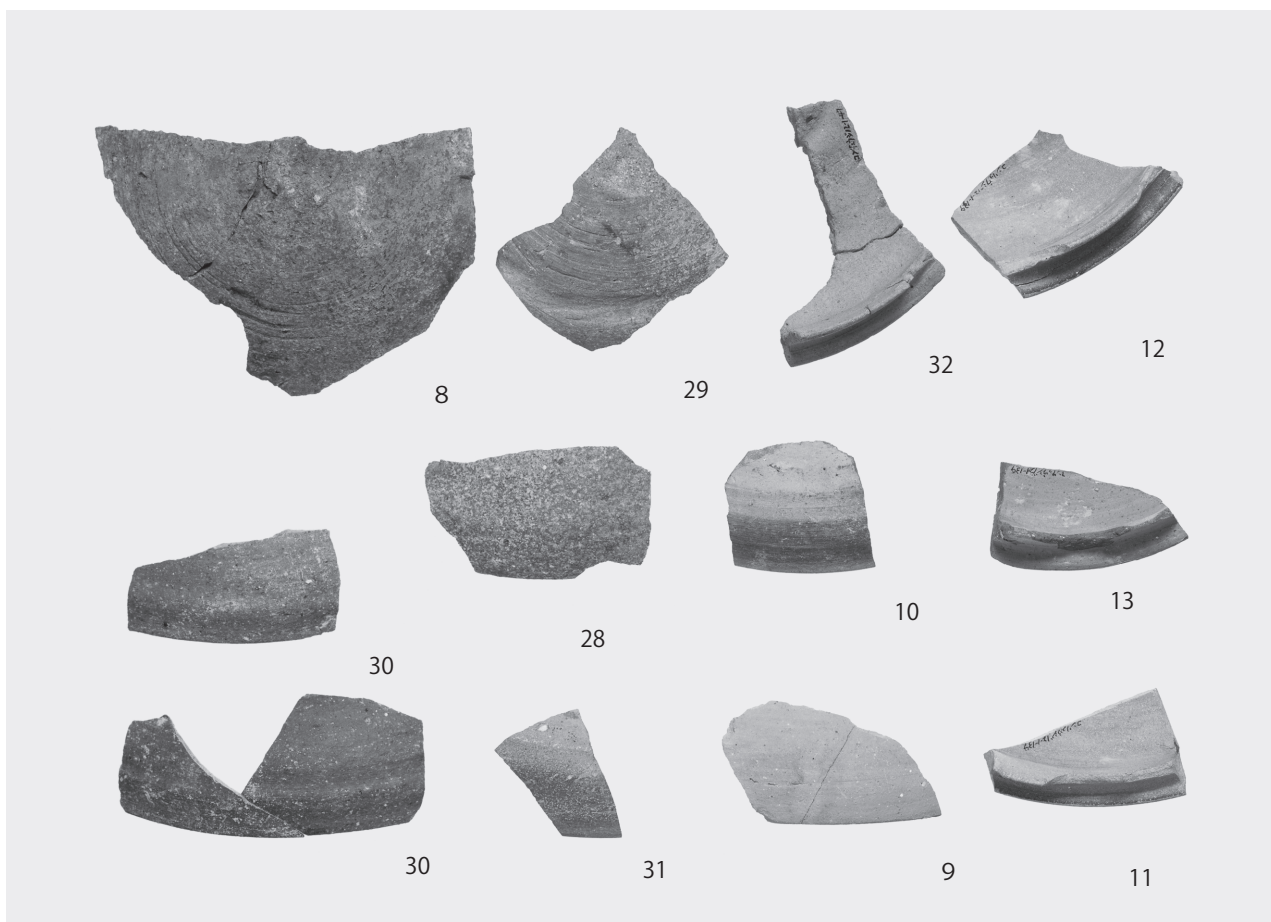


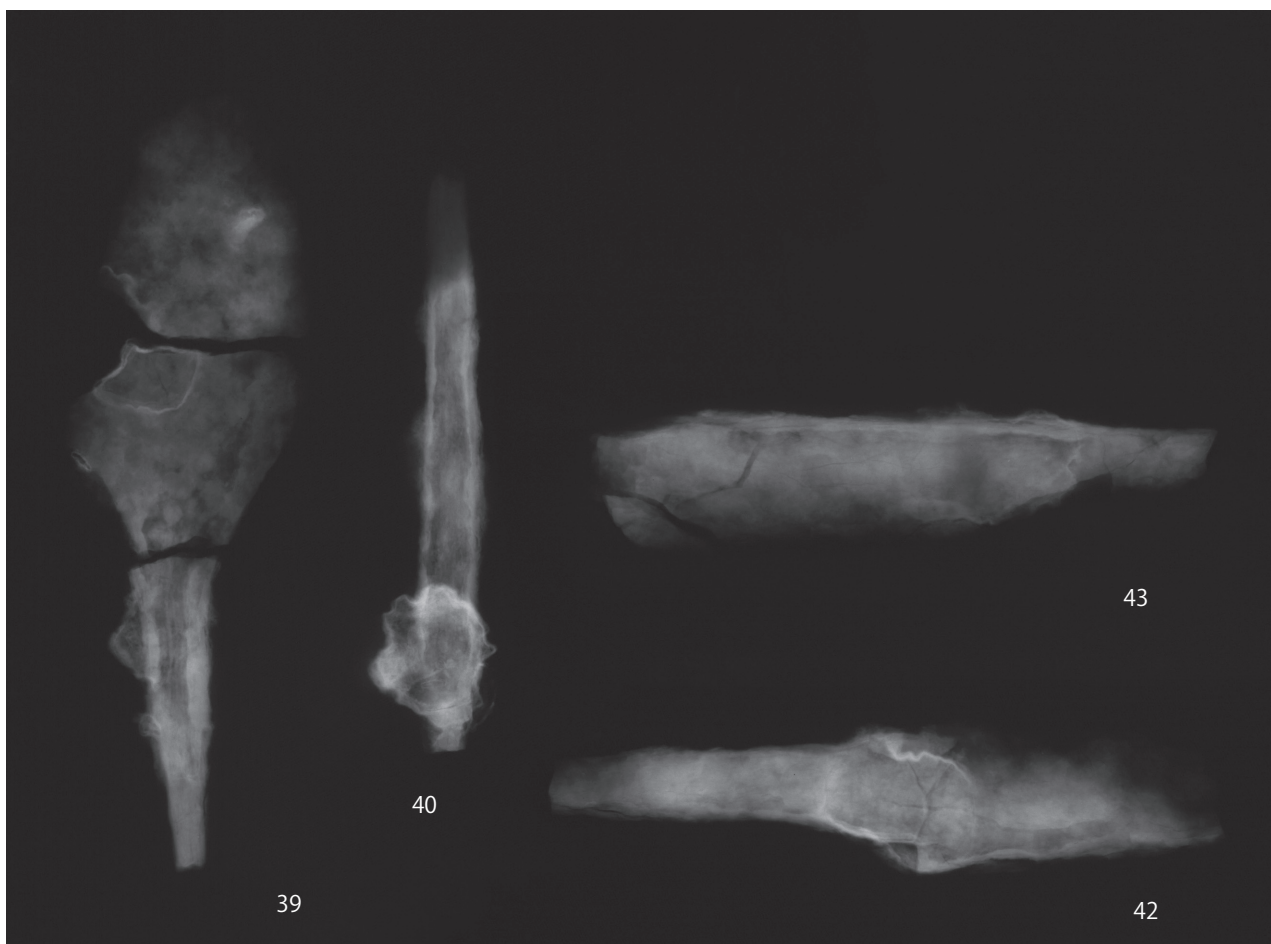
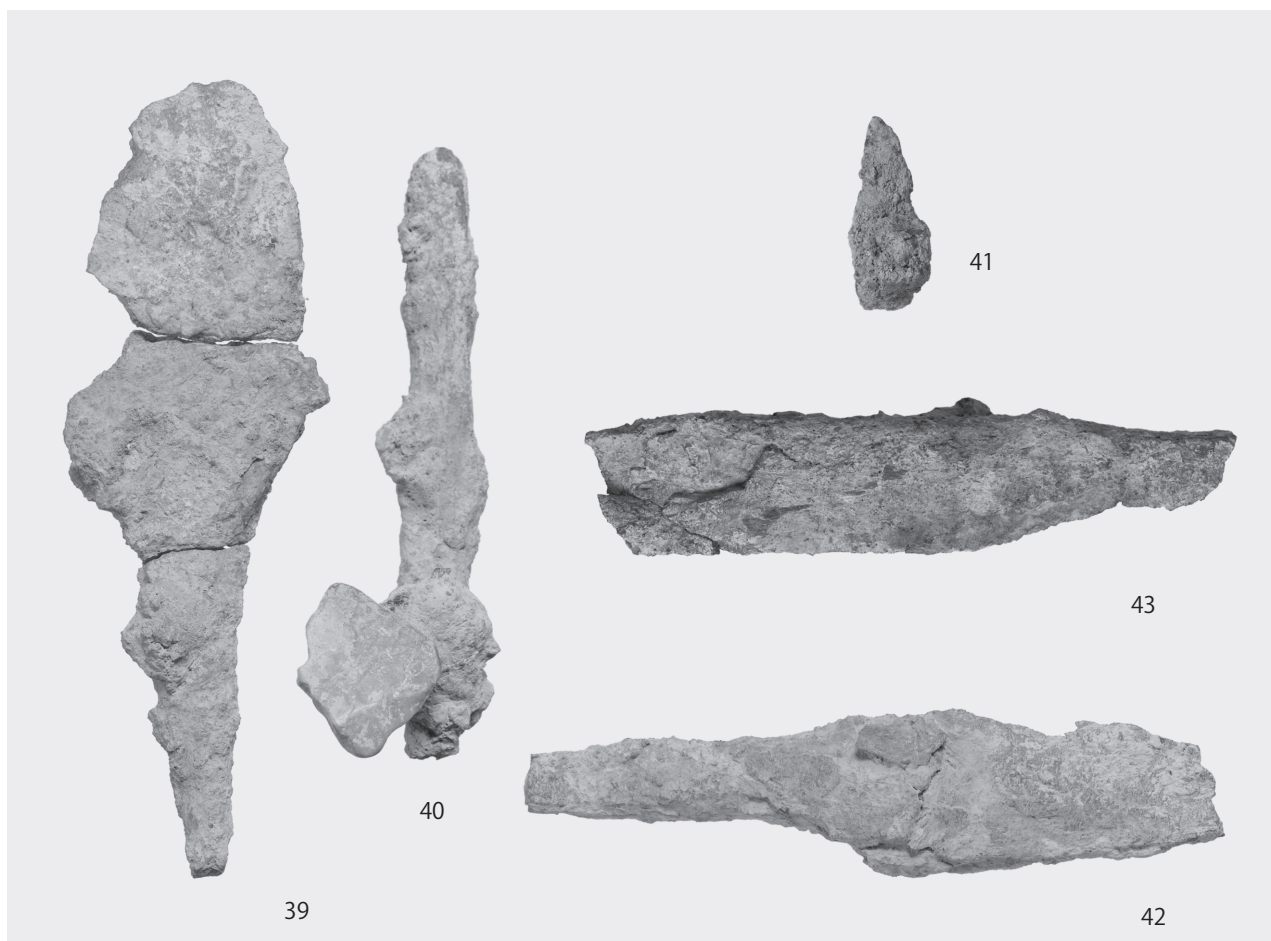
21

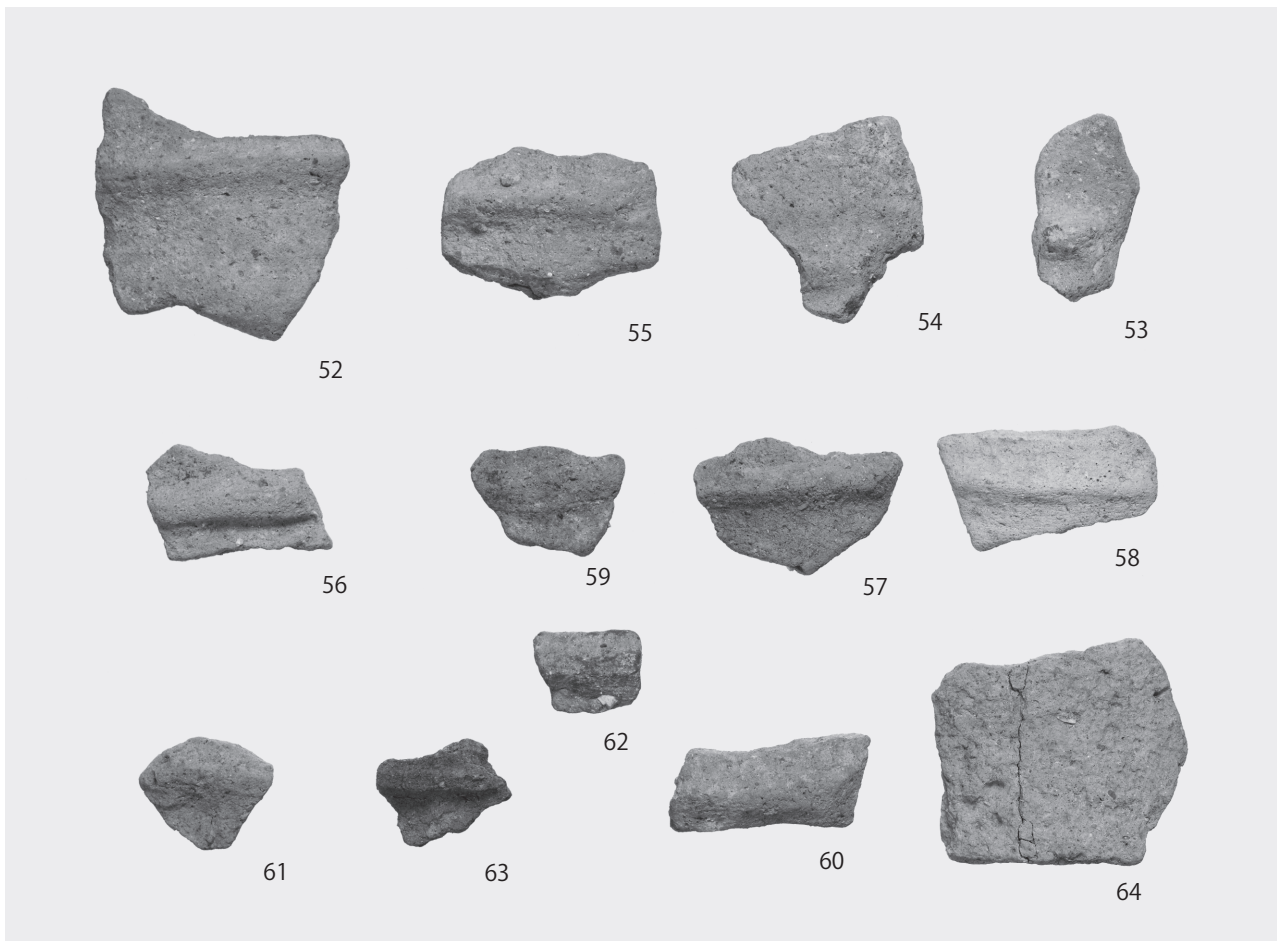
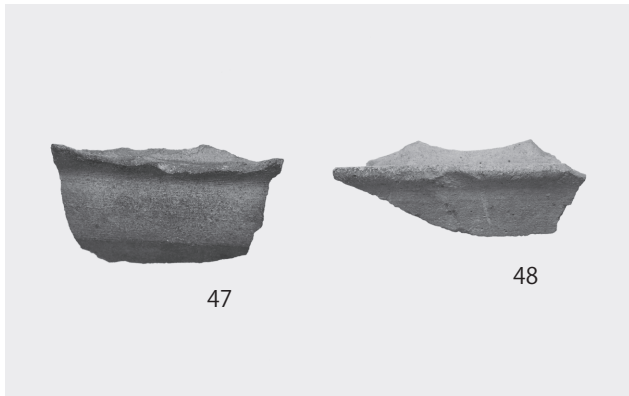
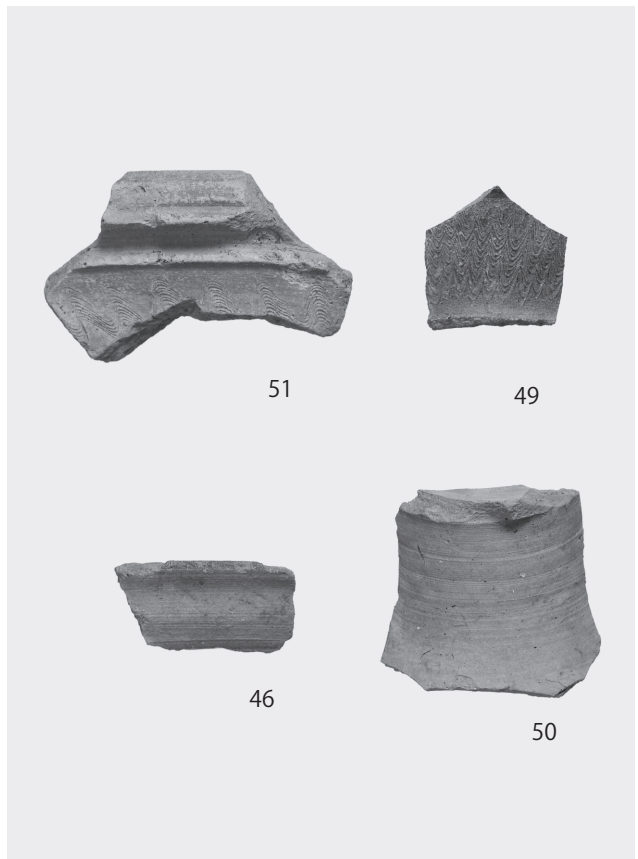
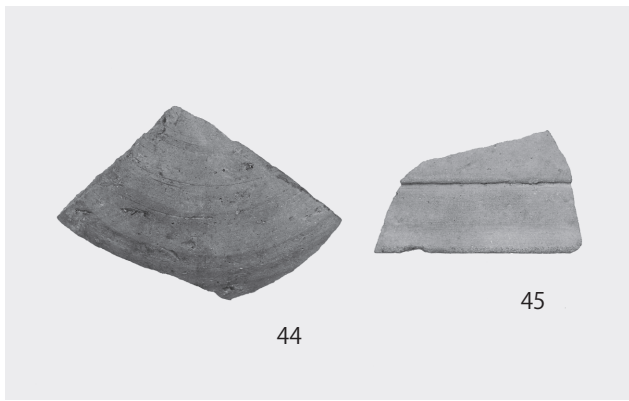


22









報告書抄録

ふりがな	なりあいいちごうふん							
書名	成合1号墳							
副書名	主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）整備に伴う埋蔵文化財調査業務委託（その2）・近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（高槻～箕面間）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査（その3）							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第234集							
編著者名	廣瀬 時習							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 堺市南区竹城台3丁21番4号							
発行年	2013年2月22日							
ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
金龍寺 旧境内跡	高槻市成合 地内	27207	141	34度 52分 24秒	135度 37分 45秒	2012年 6月1日 ～ 9月29日	1,146 m ²	近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（高槻～箕面間）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路成合工区）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査（その3）
	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	古墳～中 世	古墳 土坑 ピット		弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 瓦 鉄鏃 刀子			
要約	成合1号墳は、金龍寺旧境内跡内において新規に確認された横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳時代後期の古墳である。横穴式石室自体は石材が抜き取られかなりの破壊を受けていたが、基底部および床面が良好に検出され、須恵器・鉄製品などがほぼ本来の位置を保った状態で検出されている。現状では、周辺に古墳がみられないことから、単独墳の可能性もある。高槻市成合谷地域の歴史を考える重要な資料である。							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 234 集

成合 1 号墳

主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）整備に伴う埋蔵文化財調査業務委託（その 2）・近畿自動車道名古屋神戸線新設事業（高槻～箕面間）と主要地方道伏見柳谷高槻線バイパス（高槻東道路 成合工区）事業との同時施行に伴う埋蔵文化財調査（その 3）の発掘調査

発行年月日 2013 年 2 月 22 日
編集・発行 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号
印刷・製本 株式会社 明新社